

年報  
津山弥生の里

# 津山 弥生の里

第23号（平成26年度）

年

報

津山  
弥生  
の里

第  
23  
号

津山  
弥生  
の里  
文化財  
センタ  
ー

2016

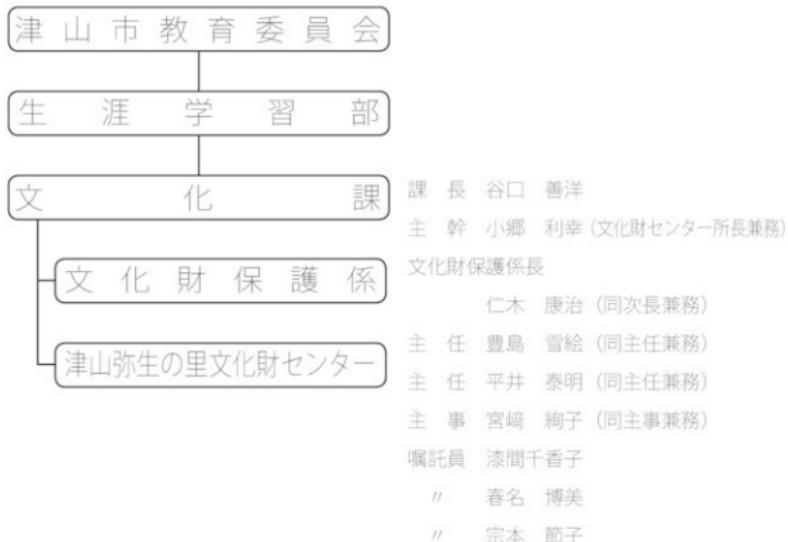
津山弥生の里文化財センター

# 目 次

機構図及び職員配置・例言 ii

第Ⅰ部 津山弥生の里文化財センター事業概要	1
I-A 展示事業	3
I-A-1 入館者数	3
I-A-2 啓発、普及活動	3
I-A-3 寄贈資料	4
I-B 文化財センター日誌抄（平成 26 年度）	5
I-C 埋蔵文化財発掘調査	7
I-C-1 平成 26 年度届出関係一覧	7
I-C-2 現地説明会	8
第Ⅱ部 調査の概要	9
II-A 市内遺跡試掘・確認調査報告	11
II-A-1 勃使遺跡確認調査	11
II-A-2 大田大正開遺跡確認調査	14
II-A-3 中山横穴墓確認調査	16
II-A-4 鏡音免古墳測量調査	28
II-A-5 七つ塚古墳群測量調査	29
II-A-6 大沢古墳 5 号測量調査	31
II-B 戸島男戸島西遺跡発掘調査報告	32
II-C 美作国府跡確認調査報告	41
第Ⅲ部 文化財の保護・管理	45
III-A 文化財の保護	47
III-A-1 文化財保護委員会	47
III-A-2 新指定の文化財	47
III-A-3 文化財防火訓練	47
III-B 指定文化財の保存管理	47
III-B-1 国指定文化財	47
III-B-2 県指定文化財	47
III-B-3 市指定文化財	47
III-B-4 その他の文化財	48
III-C 歴史民俗資料館の管理運営	48
III-C-1 加茂町歴史民俗資料館	48
III-C-2 勝北歴史民俗資料館	48
III-C-3 久米歴史民俗資料館	48
III-C-4 阿波民具館	48
III-D その他	48
第Ⅳ部 資料紹介・研究ノート	49
IV-A 『津山城本丸御殿絵図』の検討	51
IV-B 美作の狛犬（7）	62

## 平成 26 年度機構図及び職員配置



### 例　　言

1. 本書は、津山市教育委員会生涯学習部文化課（文化財保護係）が平成 26 年度に実施した事業概要などについてまとめたものである。
1. 平成 26 年度の埋蔵文化財発掘調査は、小郷利幸、仁木康治、豊島雪絵、平井泰明、宮崎純子が、出土遺物の整理は上記の他、漆間千香子、春名博美、宗本節子が担当した。また、指定文化財の保存管理事業は宮崎純子が主として担当した。本書の執筆は各担当者が行なった。
1. 本書のデータは、PDF フォーマットで保管している。

第Ⅰ部  
津山弥生の里文化財センター  
事業概要



## A. 展示事業

### 1. 入館者数

平成 26 年度の入館者数は下表のとおりである。

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
大人	90	136	36	50	45	26	78	42	16	32	38	63	652
子供	109	163	59	32	20	11	120	104	135	115	54	126	1,048
合計	192	340	354	72	89	41	218	341	31	129	183	112	1,700

表 1 平成 26 年度総利用者数内訳

### 2. 啓発、普及活動

#### 【刊行物】

『年報 津山弥生の里 第 22 号』

『畔田遺跡・追法師遺跡・黒岩遺跡ほか』

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 84 集

『旧津山藩別邸園(衆楽園)』

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 85 集

#### 【講演会など】

◇第 33 回津山市文化財調査報告会

日 時 平成 27 年 3 月 7 日 (土)

13:30 ~ 16:30 (参加者 60 名)

場 所 グリーンヒルズ津山 リージョンセンター

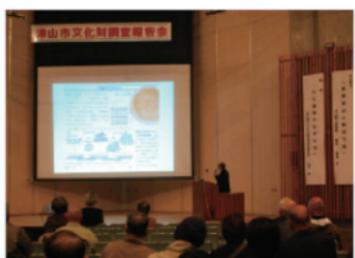
内 容

研究報告 「広瀬臺山と饭塚竹齋」

津山郷土博物館館長 尾島 治さん

講 演 「出土遺物の科学分析」

岡山理科大学生物地球学部教授 白石 純さん



第 33 回文化財調査報告会

#### 【外部講演】

開催日	演題など	講 師	会場と参加者	主催者ほか
4/4 (金)	津山市文化財探訪	小野利幸	美和山古墳群ほか 42 名	さぬき市文化財 保護協会
5/8 (土)	大昔のくらし	仁木康治	高田小学校 6 年生 18 名	高田小学校
5/31 (土)	津山市の遺跡見学	豊島雪絵	美和山古墳群ほか 21 名	明治大学博物館 友の会
9/8 (木)	津山城跡ウォーキング	小野利幸	津山城跡 22 名	岡山県道公連津 山吉田支部
9/18 (木)	古代の美作国	仁木康治	鷺山文化センター 45 名	真庭市教育委員 会
10/19 (木)	美作国の古墳とそ の特質	小野利幸	アルネ津山 35 名	山陽新聞社津山 支社
10/26 (木)	弥生時代の津山地 域	仁木康治	アルネ津山 26 名	山陽新聞社津山 支社
10/26 (木)	津山の遺跡	小野利幸	東若田公民館 200 名	東若田公民館
11/1 (土)	衆楽園について	豊島雪絵	衆楽園 52 名	津山市家庭教育 推進協議会
11/8 (土)	蛭社宮を訪ねる	宮崎梅子	蛭社宮ほか 18 名	蛭社市西公民館
11/9 (日)	陶棺のふしぎ	豊島雪絵	加茂町文化セン ターハウス 19 名	加茂郷土史研究 会
11/22 (土)	津山城探訪ツアー	豊島雪絵	津山城跡 42 名	津山市観光協会
11/23 (日)	津山城探訪ツアー	宮崎梅子	津山城跡 18 名	津山市観光協会
11/28 (金)	生糸とダンゼ	仁木康治	津山グンゼ本社 37 名	見て學んで親しむ歴史遺産 (二宮公民館)
2/20 (金)	立石家と二宮地区 の文化財	平井泰明	二宮公民館 25 名	見て學んで親しむ歴史遺産 (二宮公民館)

### 【研究会】

美作考古学談話会（会員 14 名）

	日 時	演 領	講 師	参 加 者
第1回	5/31 (土)	旧石器時代の考古学	平井泰明	4名
第2回	7/19 (土)	縄文時代のくらし	宮崎樹子	5名
第3回	9/ 6 (土)	冠木門跡の発掘調査 現地見学会	豊島雪絵	5名
第4回	11/22 (土)	弥生土器の地域性	仁木康治	4名
第5回	1/17 (土)	考古遺物の文字資料	小郷利幸	5名
第6回	3/21 (土)	地域の文化財（二宮編）	平井泰明	3名

### 【収蔵資料の特別利用】

申請者	資料名	利用内容	出版物等
一般社団法人 津山青年会議所	津山城 CG 合成写 真	映像引用 『夢灯り～いいく ね！みんなのま ち～』	
日本遺跡学会	津山城全景写真	画像掲載 『遺跡学の宇宙 - 戦後黎明期を逃 いた 13人の記録 』	
株式会社 グレイル	美和山古墳群写真	画像掲載 『古墳の地図帳』	
個人	手焙煎土器 (天神原遺跡・上部 道路・高橋谷遺跡)	熟覧	調査研究
個人	山ノ奥遺跡石器・ 剝片	熟覧	調査研究
吉備人出版	横野和紙漉き写 真、合せ紙・横野 和紙写真	画像掲載 『ビジュアル版 岡山の文化財』	
津山市 觀光振興課	備中橋	撮影	ストリート ビュー撮影

### 【速報展】

発掘調査速報展

『津山の歴史を握る - 美作国建国 1300 年記念 -』

- ◇美作国府跡：須恵器（杯蓋・身、「苦」印）、  
土師器（皿）、軒丸瓦、円面鏡、綠釉陶器
- ◇美作国分寺跡：軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、  
埠
- ◇中宮 1 号墳：円筒埴輪、鉄鎌、馬具（轡、鉗、  
雲珠、鏡板）
- ◇六ツ塚古墳群：円筒埴輪

### 【収蔵資料の貸し出し】

資料名	相手方	期 間	理 由
和傘 6 点	個人	H26. 4.11 ~ H26. 5.11 H26. 5. 9 ~ H26. 6. 9 H26. 6.20 ~ H26. 7.20	資料作成 のため
火おこしセット 4 点	広野 小学校	H26. 4.21 ~ H26. 5. 1	授業
津山城跡出土 遺物 7 点、 写真資料 2 点	岡山県立 博物館	H26. 7.24 ~ H26. 9.26	企画展 「岡山の城 と朝倉武 将」
岩屋城跡出土 遺物 5 点			
山ノ奥遺跡出土 遺物 9 点	岡山県立 博物館	H26. 9. 2 ~ H26. 10.24	特別陳列 「大地から の便り」
美作国府跡出土 遺物 12 点			

### 3. 寄贈資料

下記の方、団体から資料の寄贈がありました。寄贈  
いただいた資料は文化財センター資料として保存活用  
させていただきます。

寄贈者	寄贈資料
個人	瓦 1 点
個人	須恵器 4 点、土師器 1 点
個人	須恵器破片 1 点、中世妻片 14 点
個人	唐瓦 1 点
個人	ミシン 1 点
勝加茂小学校	ミシン 2 点
広戸小学校	ビアノ 1 点
個人	稻刈結束機 1 点

## B. 文化財センター日誌抄（平成 26 年度）

平成26年

- 4月 4日 さぬき市文化財保護協会の文化財探訪を案内（小郷）
- 4月 9日 障害者に史跡津山城跡を開放するための登城路の警備（仁木・豊島・平井・宮崎）
- 5月 8日 高田小学校出前講座（仁木）
- 5月31日 明治大学博物館友の会の遺跡見学を案内（豊島）  
第1回美作考古学講話会の開催（平井）
- 6月 3日 平成27年度国庫補助事業ヒアリングのため県庁に出張（小郷・仁木）
- 6月 4日 中道中学校・津山西中学校チャレンジワーク（～6日）



中道中・津山西中チャレンジワーク

- 6月11日 奈良文化財研究所星野安治研究員 高野神社隨身門等年輪年代調査のため来津（小郷・仁木）
- 6月14日 美作の中世山城連絡協議会総会に出席（谷口）
- 6月16日 荏田酒造エネルギー株式会社 まちづくり功劳者国土交通省大臣表彰（東京すまい・るホール）
- 6月25日 市町村文化財担当者会議のため県立図書館に出張（仁木・宮崎） 7月17日 全国史跡整備市町村協議会中国地区協議会出席のため備前市に出張（小郷・宮崎）
- 7月19日 第2回美作考古学講話会を開催（宮崎）
- 8月 6日 津山やよいライオンズクラブによる沼弥生住居址群草刈奉仕作業
- 8月 8日 岡山県史跡整備市町村協議会総会出席のため矢掛町に出張（小郷）
- 8月27日 第36回史跡津山城整備委員会開催

- 8月28日 第1回津山市文化財保護委員会開催
- 9月 6日 史跡津山城跡冠木門発掘調査現地説明会、第3回美作考古学講話会を開催（豊島）
- 9月17日 北陵中学校チャレンジワーク（～19日）



北陵中チャレンジワーク

- 9月18日 岡山県退公連津山苦田支部の津山城跡ウォーキングを案内（小郷）  
勝山文化センターで講演（仁木）
- 10月 8日 美作地区文化財指導者研修会出席のため久米南町に出張（小郷）
- 10月19日 山陽新聞カルチャーブラザアルネ津山教室で講演（小郷）
- 10月26日 山陽新聞カルチャーブラザアルネ津山教室で講演（仁木）  
東苦田公民館で講演（小郷）
- 11月 8日 総社市西公民館講座案内（宮崎）
- 11月 9日 加茂歴史講演会が加茂町文化センターで開催、講演（豊島）
- 11月18日 総社東だんじり修理見学会（小郷）
- 11月21日 東新町だんじり修理見学会（小郷・平井）
- 11月22日 第4回美作考古学講話会を開催（仁木）  
津山城探訪ツアーで解説（～23日、豊島・宮崎）
- 11月28日 勝間田町だんじり修理見学会（小郷・平井）
- 12月 6日 全国伝統的建造物群保存地区協議会中国・四国ブロック伝建担当者研修会を津山市で開催（～7日、仁木・宮崎）
- 12月10日 可兒郷土歴史館企画展の打ち合わせのため、長瀬治義館長ほか來訪
- 12月13日 津山市史古代史部会巡見（中宮1号墳ほか）（小郷）

- 12月19日 菊田酒造エネルギー株式会社・菊田美佐子氏組綬褒章伝達式
- 12月20日 菊田家住宅及び酒造場で酒蔵おんがく祭を開催
- 平成27年
- 1月16日 岡山県史跡整備市町村協議会研修会出席のため高梁市に出張（平井）
- 1月17日 第5回美作考古学談話会を開催（小郷）
- 1月20日 勝間田町だんじり修理見学会（小郷・平井）
- 1月21日 本源寺・成道寺・高野神社で文化財防火査察（仁木・宮崎）



文化財防火査察（本源寺）

防災設備について現地指導（小郷・仁木・宮崎）

- 3月7日 第33回津山市文化財調査報告会をリージョンセンター・ペンタホールで開催
- 3月10日 津山市史考古部会を開催（小郷・仁木）
- 3月11日 新採用職員研修施設見学、可児郷土歴史館企画展打ち合わせのため、長沼穀主任ほか来訪（～12日）
- 3月21日 第6回美作考古学談話会を開催（平井）
- 3月23日 史跡津山城跡整備事業について、文化庁記念物課本中真主任文化財調査官と協議（小郷・豊島）
- 3月29日 史跡美作国分寺跡公有化事業地元説明会
- 3月30日 第37回史跡津山城整備委員会開催
- 3月31日 第2回津山市文化財保護委員会開催

- 1月22日 津山郷土博物館及び岡山県立津山高等学校本館・田熊の舞台で文化財防火査察（仁木・平井）
- 1月22日 第12回全国城跡等石垣整備調査研究会出席のため名古屋市に出張（～24日、豊島・宮崎）
- 1月25日 阿波八幡神社で市消防団による文化財防火訓練を実施（谷口・小郷・仁木）
- 2月4日 平成26年度第2回埋蔵文化財担当職員等講習会のため岡山市に出張（～5日、小郷・宮崎）
- 2月17日 津山市史自然風土・考古部会を開催（小郷・仁木・豊島・平井・宮崎）
- 2月20日 二宮公民館で講演（平井）
- 2月23日 岡山歴建委員会シンポジウム出席のため岡山市に出張（宮崎）
- 2月25日 第1回津山市史編さん委員会に出席（小郷）
- 3月4日 文化庁参事官北河大次郎調査官 本源寺の

## C. 埋蔵文化財発掘調査

### 1. 平成 26 年度届出関係一覧

#### 埋蔵文化財発掘の届出（法第 93 条）

遺跡名	所在地	工事種別	期間	面積 (m <sup>2</sup> )	津山市発表看板文	発信日	指示事項	実施日	備考
津山城跡	山下 50-1	個人住宅	6.5 ~ 9.15	528.73	第 545 号	5.1	立会	6.6	道構・遺物無し
戸船男戸島道路	戸島 974 畷	太陽光発電	未定	60,000	第 602 号	5.8	発掘調査	-	本書参照
近接八ヶ原遺跡	近接 646-7 9 畷	個人住宅	6.10 ~ 11.1	355.72	第 890 号	5.30	立会	6.13	道構・遺物無し
美作国府跡	小原 5-4	宅地造成	7.30 ~ 8.30	1,812	第 910 号	5.31	立会	8.21	道構・遺物無し
野村沖田御跡	野村 481-3	個人住宅	8. 中 ~ 12. 矢	197.31	第 1119 号	6.25	立会	9.3	道構・遺物無し
曾根田遺跡	瀬生原 854-1 外	個人住宅	8.28 ~ 1.30	280	第 1275 号	6.30	立会	9.2	道構・遺物無し
美作国府跡	山北 2-35 畷	個人住宅	6.28 ~ 10.26	254.79	第 1539 号	7.24	-	-	木構
高野山西山道路	高野山西 1449-3 9 畷	墓地造成	H24.8 ~ H24.9	63	第 1573 号	7.23	-	-	木構
勝部上河原遺跡	勝部 667-3 畷	倉庫	-	-	第 1723 号	8.5	立会	8.27	道構・遺物無し
美作国府跡	坂社 23-1 外	仮設喫食	10.15 ~ 11.30	632.07	第 1885 号	8.15	立会	9.1 ~ 9.2	道構・遺物無し
野介代就場平道跡	野介代 1518-1	個人住宅	8.28 ~	369.14	第 1925 号	8.21	立会	9.1	道構・遺物無し
旧山陰別邸跡	山北 629-5	個人住宅	~ 12.30	301.76	第 1974 号	8.25	立会	9.7	道構・遺物無し
岩屋城跡	中北上 614	作業室	3. 中旬 ~ 下旬	29.406	第 1960 号	8.21	-	-	木構
美作国府跡	山北 376-2 外	個人住宅	10.14 ~ 12.14	364.23	第 2077 号	9.2	立会	10.16	道構・遺物無し
泊京免遺跡	泊 6-21	個人住宅	10.2 ~ 12.14	207.11	第 2211 号	9.12	立会	10.9	道構・遺物無し
中原道跡	福力 212-12 畅	個人住宅	9.25 ~ 2.28	253.3	第 2317 号	9.22	立会	9.27 10.14	道構・遺物無し
津山城跡	山下 46-21	建物全体	10.8 ~ 10.31	412.7	第 2499 号	10.3	立会	10.27	道構・遺物無し
美作国府跡	小原 5-2	個人住宅	11.20 ~ 3.20	223.78	第 2765 号	10.27	立会	12.25 1.20	道構・遺物無し
美作国分寺跡	日上 141 外	個人住宅	11.17 ~ 3.31	43.66	第 2860 号	11.4	立会	11.28 12.8	道構・遺物無し
美作国府跡	坂社 44-1	太陽光発電	未定	708	第 3061 号	11.18	立会	4.15 4.16	事後確認
東一宮始遷跡	大田 492-4 畷	宅地造成	2.1 ~ 3.0	651.98	第 3088 号	11.19	立会	12.7 2.25	道構・遺物無し
中原道跡	中原 325-1	貢材賣場	12.23 ~ 2.10	1,646	第 3440 号	12.19	立会	12.25	道構・遺物無し
一方北跡	津山口 294-1 外	駐車場	2.20 ~ 4.20	2,063	第 3394 号	12.15	立会	-	-
美作国府跡	坂社 27-1 外	廻合施設	3.1 ~ 11.30	1,397.52	第 3530 号	12.26	発掘調査	-	-
勝部上河原遺跡	勝部 667-3 畷	個人住宅	2 ~ 中	785.87	第 3674 号	1.15	立会	-	-
東一宮始遷跡	大田 492-4 外	個人住宅	4.1 ~ 4.30	654.76	第 3889 号	2.2	慎重工事	-	-
泊京免遺跡	泊 7-11	宅地造成	4.15 ~ 5.15	805	第 4202 号	2.23	立会	4.16 4.17	溝を検出
津山城跡	山下 68	特設設置	4.15 ~ 5.30	0.72	第 4306 号	3.2	立会	3.20	道構・遺物無し
美作国府跡	小原 5-17	個人住宅	4.1 ~ 7.30	189.55	第 4512 号	3.13	立会	5.27	-
美作国府跡	小原 5-14 外	個人住宅	4.5 ~ 10.2	108.26	第 4557 号	3.13	立会	12.27	道構・遺物無し
野介代亞耶敷遺跡	野介代 952-5	駐車場	5.20 ~ 8.20	1,305	第 4699 号	3.26	立会	調査実施	道構・遺物無し

#### 埋蔵文化財発掘の通知（法第 94 条）

遺跡名	所在地	工事種別	期間	届出者	津山市発表看板文	発信日	指示事項	実施日	備考
津山城跡	山下 2303	上下水道	8 ~ 12.19	津山市山下水道事業管理者 職務代理者 局長 須田博史	第 1785 号	8.11	立会	10.20 ~ 12.10	道構・遺物無し

#### 埋蔵文化財発掘調査の報告（法第 99 条）

遺跡名	所在地	遺跡種別	調査期間	面積 (m <sup>2</sup> )・原因	津山市発表 看板文	発信日	調査担当	備考
戸船男戸島道路	戸島 974 畷	集落跡	5.23 ~ 6.30	450・太陽光発電施設	第 545 号	5.23	仁木・平井	本書参照
勤使跡	高野本郷 2375	社寺跡	1.29 ~ 2.28	30・遺跡保存	第 3834 号	1.29	平井	本書参照
中山穴窓	久米川南 3155	機窓	3.2 ~ 3.31	30・自然崩壊	第 4264 号	3.2	平井	本書参照

#### 埋蔵文化財試掘確認調査の報告（法第 99 条）

遺跡名	周知・未周知	所在地	調査期間	面積 (m <sup>2</sup> )	原因	津山市発表 看板文	発信日	調査担当	備考
戸船男戸島道路	周知	戸島 974 畷	4.25 ~ 4.28	450・太陽光発電施設・有	第 597 号	5.2	仁木・平井	本書参照	
美作国府跡	周知	山北 367-1 畷	10.7 ~ 11.18	33.5・道路・無	第 3158 号	12.2	平井	本書参照	
大田大正開道跡	周知	大田 883 畷	11.5 ~ 11.19	46・保育用地造成・無	第 3260 号	12.1	仁木	本書参照	

2. 現地説明会

史跡津山城跡冠木門発掘調査

平成 26 年 9 月 6 日（土）（参加 50 名）



史跡津山城跡発掘調査現地説明会

第II部  
調査の概要



## A. 市内遺跡試掘・確認調査報告（平成 26 年度）

津山市が平成 26 年度に国庫補助事業（市内遺跡発掘調査等）でおこなった事業についての概要報告である。調査は、保存に伴う確認調査（勅使遺跡、大田大正開遺跡、中山横穴墓）、測量調査（觀音免古墳、七つ塚古墳群、大沢古墳 5 号）の 6 件である。

### 1 勅使遺跡確認調査

a. 調査地 津山市高野本郷 2439-1

b. 調査期間

平成 27 年 1 月 29 日～平成 27 年 2 月 25 日

c. 調査面積 30m<sup>2</sup>

d. 調査の概要

勅使遺跡は、津山市街地を流れる加茂川右岸の沖積地上にある。この周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲の中央付近には、勅使山円福寺の小堂があり、この辺りから白鳳期の瓦が出土したとされており、現段階では、地形や地割等から方 1 町程度の規模を持つ寺院跡が想定されている。しかし、調査は、平成 21 年度に個人住宅建設に先立って行われた確認調査のみであり、このときの調査では、遺構及び遺物ともに確認されていない。そのため、遺跡の実態はよくわかっていない。

また、近年包蔵地の範囲及び周辺で宅地化が進みつつあることから、遺跡の性格等の把握及び資料蓄積を目的として確認調査を実施した。

調査はまず、包蔵地の範囲の境界部分にかかるように南北方向に 2 m × 15 m のトレント 1 本を設定し、人力にて掘削を行い遺構の有無等の確認を行った。実作業日数は 10 日である。

（層位）

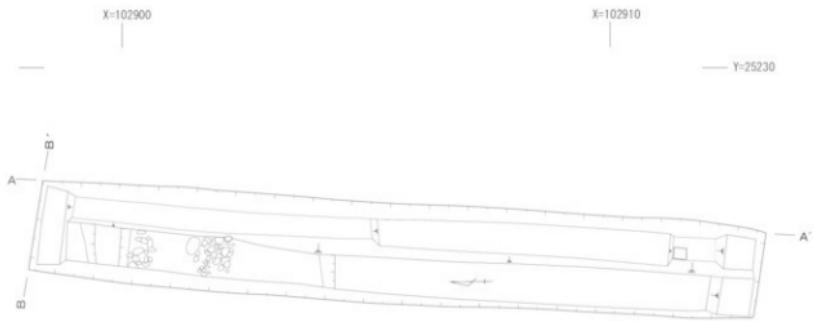
耕作土直下に、②の砂層が現れる。その下に①とは別の③の耕作土及び④の耕作土下の層が確認できる。続いて⑤及び⑥の層があり、後に述べる溝状の遺構が⑤から切り込まれていることから⑤が遺構検出面であると



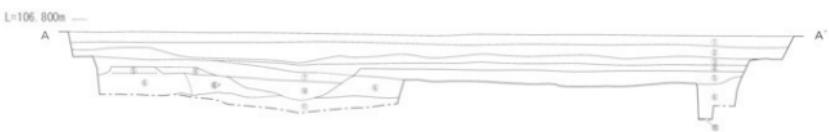
第 1 図 調査位置図



第 2 図 調査トレント位置図 (S=1/2,500)



0 2m  
1/100



第3図 トレンチ平面図・断面図 (S=1/100)

考えられる。その下は①の砂礫層が続いている。

(検出された遺構と遺物)

溝状の遺構がトレーンチ北側から検出された。調査範囲が狭く断定できないが概ね東西に流走しているようである。溝の幅は上端で約4.2m、床面幅約3.9mを測る。深さは10～30cm程度である。断面形は逆台形を呈する(断面図⑦⑧)。この遺構内からは勝間田焼を中心とした遺物が出土している。

なお、土層の観察からこの遺構の下に溝状の層が確認されたが、形状が不定型で遺物も出土していない。断定はできないが自然流路と考えられる。

eまとめ

今回、溝状の遺構を検出したが調査範囲が狭く、遺構の性格を把握するに至っていない。したがって想定される寺院域の区画溝であるか否かについても判断できなかつた。今後はこの溝状の遺構の性格を把握するため、この遺構の範囲(流れの方向)を確認する必要があると考えられる。

(平井泰明)



調査前（北西から）



トレーンチ断面（西から）



溝状周辺2（東から）



完掘（北から）



調査終了（北西から）



作業風景（南から）

## 2 大田大正開遺跡確認調査

- a. 調査地 津山市大田 883 番地 外
  - b. 調査期間 平成 26 年 11 月 5 日～平成 26 年 11 月 19 日
  - c. 調査面積 46.2m<sup>2</sup>
  - d. 調査の概要
- 津山市一宮地内にある市立一宮保育所の移転先として、グリーンヒルズ津山地内にある現候補地が決定した。建設予定地は、用地南端が周知の遺跡 大田大正開遺跡 の遺跡範囲北限に接する。このため、当該地付近の遺構の有無、及び遺構が所在した場合における造成工事及び建設計画との協議資料作成のためのデータを得ることを目的として試掘調査を実施した。

グリーンヒルズ津山の建設に際しては、岡山県教育委員会（岡山県古代吉備文化財センター）によって事前に埋蔵文化財の発掘調査が実施され、大田大正開遺跡については、縄文時代から江戸時代にわたる遺構が検出された。主な遺構としては、弥生時代の建物跡や土壙などが確認されている。

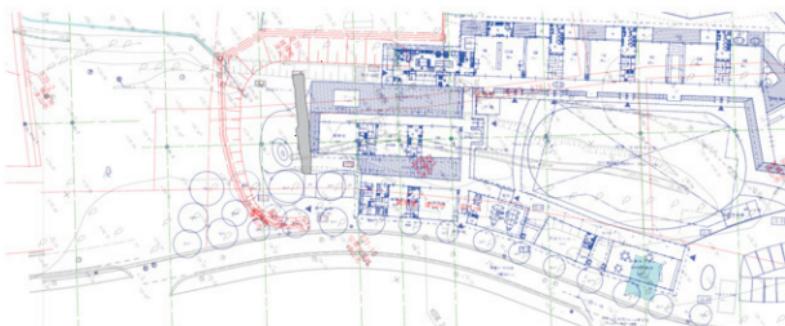
今回の調査位置は、現況で緑地して利用されていた。調査にあたっては、旧地形図及び岡山県教育委員会による試掘調査の調査位置及び成果を参考に、旧地形の等高線に直交するかたちでほぼ東西方向に長さ 20 m、幅 2 m のトレントを設定した。ただし、調査中に盛土部分が若干崩落したため、調査面積はやや増加している。調査は、重機を使用して調査員立会いのもと造成層の掘り下げを行い、終了後作業員による基盤層までの掘り下げと精査を行った。また、トレントの東半は概ね基盤層まで検出できたが、西半は、現施設に伴う暗渠排水と電気設備が所在したため、当該個所付近では基盤層の検出が可能であった部分のみの確認としている。

発掘の状況は、表土直下に約 1.2 m の造成層がみられ、下層は旧水田に伴うとみられる造成土が部分的に若干確認できましたが、概ね大きく攪乱を受けていた。検出できた基盤層については、ほぼ残存状況を確認することができた。

遺構は、基盤層を掘り込んでおかけられた暗渠排水とみられるものの残存が一部認められた。これ以外の時期の遺構については確認されなかった。出土遺物は皆無である。



調査位置図



トレント位置図

## e まとめ

今回の調査で確認された暗渠排水と考えられる遺構は、検出状況及び使用材料からグリーンヒルズ造成以前の時期で、現代のものである。これ以外には、遺構や遺物は確認されていないことから、以前の調査成果と併せて検討した結果、遺跡は造成工事用地付近までは達していないことが明確になった。 (仁木康治)



- 1. 黒褐色土(?) 1980(1)
- 2. にじく 黑褐色土(?) 1984(1) 2. 岩は 地面に伴う埋没し土
- 3. 黑褐色粘土(?) 1984(2)
- 4. 黑褐色粘土(?) 1984(1)
- 5. 黑褐色粘土(?) 1984(3)
- 6. 黑色土(?) 1984(1)
- 7. 黑褐色粘土(?) 1984(1)
- 8. 黑褐色粘土(?) 1977(6)
- 9. 黑褐色粘土(?) 1984(1)
- 10. 黑褐色粘土(?) 1982(1)
- 11. 黑褐色粘土(?) 1977(8) 砂山
- 12. 黑褐色粘土(?) 1977(8) 埋没

トレンチ平面図・断面図 (S=1/150)



調査位置遠景 (南から)



トレンチ全景 (東から)



暗渠排水遺構 (北から)



埋め戻し完了後 (南東から)

### 3. 中山横穴墓確認調査

a. 調査地 津山市久米川南 3155

b. 調査期間

平成27年3月6日～平成27年3月31日

c. 調査面積 約12m<sup>2</sup>

d. 調査の概要

#### 1 経緯と経過

津山市久米川南地内において、太陽光発電施設の設置工事中に地盤の陥没が発生した。このとき、石材とともに横穴が確認され、さらにその内部で考古遺物が出土したため、土地所有者より津市教育委員会に照会があった。それを受け、津市教育委員会職員が現地確認を行ったところ、古墳時代の横穴墓であることが判明した。所有者から現状で遺構を保存することの同意を得たが、玄室が崩落する可能性があるため、所有者の同意を得て崩落した土の除去を行い、遺構の実測等の記録をとり、埋め戻した後に保存することとした。

#### 2 位置

中山横穴墓は、吉井川とその支流である久米川の合流点近くの吉井川南側の丘陵頂部からやや北に下った場所に位置している。(第1図・第2図)

#### 3 発見時の状況

玄門及び前庭部の一部は、崩落により失われており、崩落した土の中には閉塞石とみられる石材が複数認められた。このような状況ではあるが、一部の閉塞石は原位置を保っていた。また、玄室内にも、崩落に伴う土砂の流入があり、遺物については、一部の遺物を除き既に原位置を保っていなかった。器種は、須恵器の杯・

短頸壺、土師器の甕・高杯・脚付椀等が出土している。(写真図版3)

#### 4 発見された遺構と遺物

##### (玄室)

玄室の平面形態は、明確な袖部を持つ奥壁部分の隅は角を成さず丸く形成されている。奥幅1.89m、前幅1.78m、奥行き3.25mでやや奥側が広くなっている。床面のレベルはほぼ水平で、玄室の主軸はN-E $-45^{\circ}$ である。断面の形態は半円形をしており、天井部分の軒線は無く、丸みを持ちながら天井頂部に至る。高さは約1.2mである。奥壁は、ほぼ垂直に立ちあがっており、側壁との界線は比較的明確にされている。



第1図 調査位置図



第2図 中山横穴墓周辺の遺跡分布図 (S=1:20000)

玄室床面には扁平で比較的大型の石が玄門側に配置されており、この石は奥側には配置されていないが、棺台として使用されたと考えると、棺は横穴の主軸に対して平行に置かれていたことが想定される。

玄室内の壁面及び天井部分は、一部崩落しているものの平刃状の工具による加工痕が確認できた。削りの幅は約5cmで長さは約5～30cmとまちまちで、また概して一定の方向に加工された様子は観察できなかった。ただ、奥壁近くの天井部分ではその頂部から奥壁に向かって放射状に加工している跡が確認できた。(第3図・写真図版3・写真図版4)

#### (玄門・羨道)

玄門、羨道ともに、かなり崩落している。羨道部分は長さ約30cmとかなり短く、羨道を持たず玄門のみで玄室と前庭部をつないでいるような形態である。玄門、羨道ともに、幅は床面で約70cm、高さは崩落のためわからない。閉塞施設は崩落のためかなりの部分が失われているが、閉塞に用いられている石は、直方体様の大きな石が、横穴の主軸と平行になるように配置され、小口の部分が玄室内から見えるように配置されている。この石の前庭部側に比較的小ぶりの石が控え積みとして配置されている。(第3図・写真図版4)

#### (前庭部)

前庭部は、玄門前面で大きく広がらず、狭長な墓道の形態をもつ前庭部である。幅は断面の観察から約80cm、床面はほぼ水平である。高さ、長さについては崩落及び前庭部の一部が調査対象地外に統いているため不明。(第3図)

#### (遺物)

遺物は、遺物が移動される前の写真を見ると奥壁近くの2つの石の周辺に配されていたようであるが、その後の移動により詳しいことはわからない。器種は、須恵器の杯・短頸蓋、土師器の甕・高杯・脚付椀である。

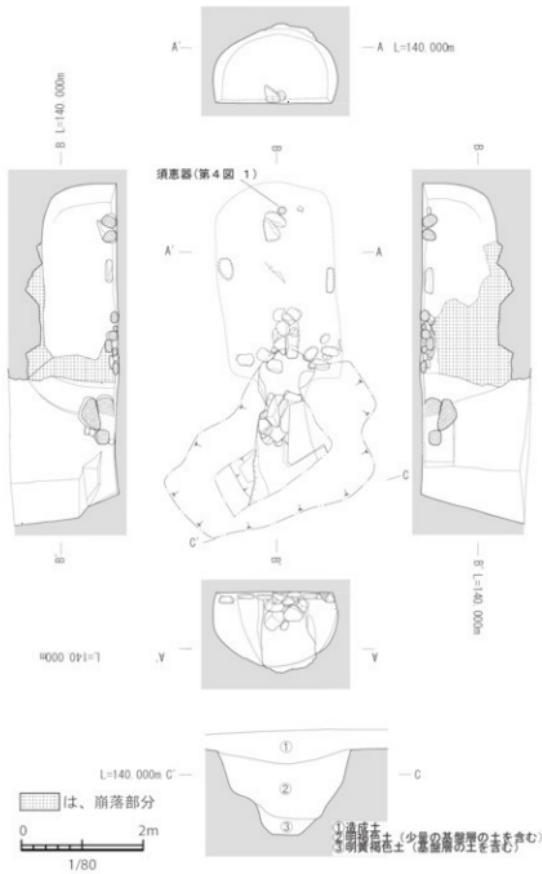
1～10は須恵器の杯身・蓋で、杯身は、口径の大きいもの5・8・9・10と小さいもの6・7があり、6・7が周期的に先行するものと考えられ、埋葬の時期差を示すものであろう。また、杯身・蓋とともに内面の中心部に成形過程で生じたものと考えられる同心円状の圧痕を残しており、特に1・2・8・9が著しい。さらに、蓋の天井部及び身の底部のヘラケズリが荒くその範囲も狭い。加えて器壁の厚さが一定ではなく、成形時の変形を修正することなく焼成されたもの8や器壁にひびが入り隙間があいているにもかかわらず使用されているもの3があるなど、全体として荒い作りの印象を受ける。11・12は短頸蓋で、11は頸部が短く直立し、体部の肩がやや張っている。底部は丸く仕上げておりナデを施す。12は11と比べて頸部がやや長く、直立ぎみに伸び肩はなだらかで最大径の部分で不明瞭ながら稜を有する。底部はヘラケズリの痕を残す。13は土師器の甕で、口縁が有段口縁でわずかに外反しており、内面ヘラケズリ、外はハケメ、口縁部分はナデを施す。14～18は脚付椀で、口縁部が内湾する椀に幅が広く低い脚部がつけられている。器壁は椀に比べ脚部が薄く、脚部には接合や成形のための指頭圧痕が残る。この器種は津山市周辺には類例がなく、山陰地方にこの器種が見られるが山陰でも類例が少なく位置づけが難しい。19～23は高杯で、概して杯底部は丸底で口縁端部は丸くおさまる。脚部は外開きで掘は大きく広がる。脚部の内外面は指による脚部の接合や調整の痕跡が残る。(第4図・表1・写真図版1・写真図版2)

#### (横穴墓の時期)

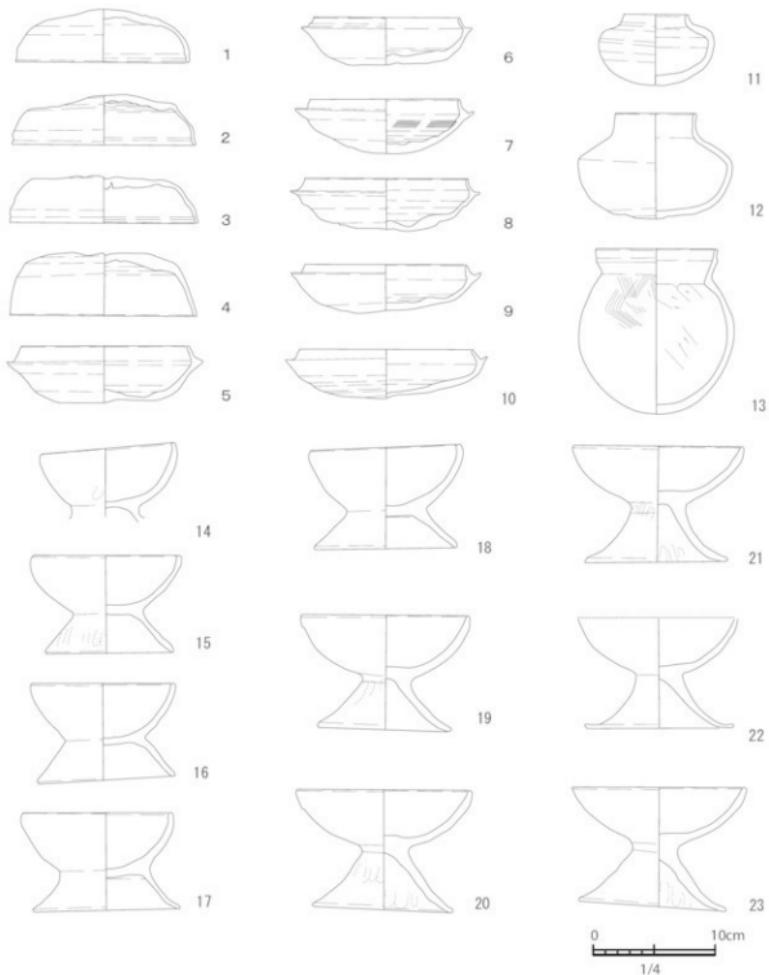
出土遺物の観察から、中山横穴墓の時期については、7世紀初頭を中心とするころのものと考えられる。  
まとめ

横穴墓は、5世紀に北部九州（豊前地域）で成立した後、本州各地に伝播し、中国地方では6世紀中頃に出雲地域に伝播したと考えられている。その出雲地域と中国山地を隔てて接している広島県北部から岡山県北西部にかけて数は多くないものの横穴墓が分布しており、岡山県下では、主に新見市（旧哲西町と旧神郷町）と真庭市（旧北房町）に分布が見られる。津山市域では、中山横穴墓を含め3例の横穴墓の報告がなされているのみである。

ここで、他の2例の横穴墓の概要を紹介し、津山市内に所在する横穴墓についてまとめてみたい。



第3図 中山横穴墓平面・断面図



第4図 中山横穴墓出土遺物

### (1) 茶臼山古墳（津山市坪井上所在）

南西から延びる丘陵突端に位置する。玄室の平面形態は、明確な袖部を持ち奥壁部分はやや不明瞭ながら角を持ち、奥幅 2.4 m、前幅 2.6 m、奥行き 2.2 m で正方形に近い平面形態である。断面の形態は半円形をしており、天井部分の軒線は無く、丸みを持ちながら天井頂部に至っている。高さは約 1.18 m である。奥壁は、ほぼ垂直に立ちあがっており、側壁との界線は比較的明確にされている。

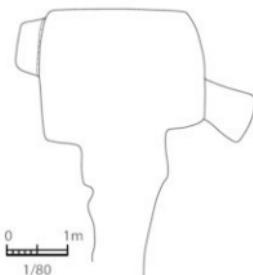
羨道は、この部分の壁を掘り下げ、本来、腰石を置いたであろう部分を掘り残し、その上から石を数段積み上げて側壁とし、天井には 2 枚の石をのせ、横穴式石室様の形態をもつ。

遺物については、現在、所在は不明であるが内部からは多量の土器が出土したと伝えられており、時期は、7 世紀のものとの記述が残る。（第 5 図・写真図版 5）

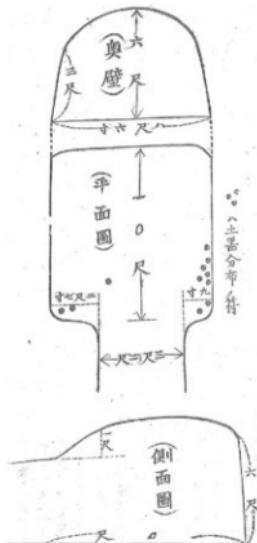
### (2) 津山市河面地内に所在と報告のある横穴

『考古界』にて光井清三郎氏によって報告があったものである。現在、所在がわかつていないため実見はできないが、氏の報告をまとめると、以下のとおりである。

- ・ 1 基単独で存在していた。
- ・ 「穴の上には土を盛り上げて圓錐形に形作られ」とあり、墳丘を有する可能性がある。
- ・ 報告中にある図面から、玄室長は約 3.03 m で奥壁付近の幅は約 2.61 m、奥壁の高さは約 1.82 m を図る。羨道部分の幅は約 0.97 m である。形態は、明確な袖部をもち断面形は半円形をし、天井部分に軒線は無く丸みをもちながら天井頂部に至り、奥壁はほぼ垂直に立ちあがっているようである。



第 5 図 茶臼山古墳平面図



第 6 図 河面所在の横穴墓

光井清三郎「美作考古界(二)」『考古界』第 2 年第 7 号 考古学会 1902 から引用

・玄室床面には、平らな石が敷き詰められていた。

・須恵器の杯や瓶などが出土した。(第6図)

次に、津山市内で確認されているこれらの3基の横穴墓のあり方を整理すると、まず、通常みられる横穴墓は群集して存在する例が多いが、津山市域の横穴は、それぞれが単独で存在していることが特徴としてあげられる。

横穴墓の形態については、玄室の形態についてみてみると、平面は主軸方向に長い長方形（中山）と正方形に近い形のもの（茶臼山・河面）があり、断面形は3基の横穴墓ともに半円形を呈し、奥壁、前壁とともに側壁と明確に区別されていて、奥壁はほぼ垂直に立ち上がっている。これらの特徴は、概ね出雲西部の特徴と重なる部分が多く、出雲西部からの影響がうかがえる。

その他の形態的特徴として、茶臼山古墳の1例のみであるが、羨道に石組がされているものがあり、このような羨道を持つ横穴は備後北部と備中北部に見られるもので、これらの地域及びこれらの地域と接している山陰地方の影響も考えられる。

出土遺物は、中山横穴墓の土器のみ実見することができるが、その中で注目されるのは、14～18の脚付椀で、前述のとおり、津山市周辺で類例は見当たらず、山陰地方において同様の器種が見られ、時期的には6世紀を通じて7世紀初めまで見られるようである。ただ、山陰地方においても出土例の少ない器種であり、その位置付けも難しいこともあり、十分な比較検討ができなかつたが、山陰地方の影響を受けて作られたか、もしくは持ちこまれたものであることが、推測される。

津山市内では今のところ、3例の横穴墓（1例は所在不明）が確認されているのみで、今後、新たな発見があつたとしても、横穴墓が津山地域での主要な埋葬施設となる可能性は低いものと考えられる。ただ今回は、事例が少ないので津山地域の横穴墓の伝播の背景や被葬者の性格といった課題に対して十分な検討を行うことができなかつた。これらのことについては、今後の資料や調査結果の蓄積をまって判断したい。

（平井泰明）

## 参考文献

- 大谷晃二「山陽地域の横穴墓の諸問題」『古代吉備』第14集 古代吉備研究会 1992  
大谷晃二「古墳群とその時期」『宮山古墳群の研究』島根県古代文化センター 島根県埋蔵文化財調査センター 2003  
大谷晃二「横穴墓」『古墳時代の考古学 棚墓構造と葬送祭儀』同成社 2011  
小口栄一郎・北島大輔・原あづさ『八橋第8・9号跡』鳥取県教育文化財団調査報告書87 財団法人鳥取県文化財団 国土文  
通省倉吉河川国造事務所 2004  
小口栄一郎・野田真弓・北沼明・岩垣健『松原古墳群』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書30 鳥取県埋蔵文化財センター  
国土交通省鳥取河川国造事務所 2010  
瀬見浩「備後口和村常定の横穴墓調査」『古代吉備』第3集古代吉備研究会 1959  
瀬見浩・難波宗朋「備中呑西町家坂の横穴調査報告」『古代吉備』第4集 1961  
高畠知功・平井泰男・柴田英樹「集成土師器」『吉備の考古学的研究』 1992  
西川忠「後期古墳に現れた地域色」『岡山県史』第二巻 原始・古代Ⅰ 岡山県史編纂委員会 1991  
原田敏照・丹羽野裕『島田池遺跡 調査遺跡』建設省松江国造工事事務所・島根県教育委員会 1997  
松山智弘・米田美江子『小浜山横穴墓群（神門横穴墓群第10支群）』出雲市教育委員会 1995  
光井清三郎「美作考古界（二）『考古界』第2篇第7号考古学会 1902  
村上幸雄「石ノ才2号墳」『穆山遺跡群II』久米開発事業に伴う文化財調査委員会 1980  
山岡延雄ほか『久米町史 上巻』久米町史編纂委員会 1984

掲載番号	器種	計測値（単位 cm）（ ）内は復元値			色調	形態・手法の特徴
		口径	底径	器高		
1	杯蓋	14.3		4.3	赤黒色	内外：ヨコナデ 天井部：回転ヘラケズリ
2	杯蓋	14.9		4.2	赤灰色	内外：ヨコナデ 天井部：回転ヘラケズリ
3	杯蓋	15.3		3.9	赤黒色	内外：ヨコナデ 天井部：回転ヘラケズリ
4	杯蓋	15.2		5.1	灰白色	内外：ヨコナデ 天井部：回転ヘラケズリ
5	杯身	13.6		4.6	灰白色	内外：回転ナデ 底部：回転ヘラケズリ
6	杯身	11.9		3.9	灰白色	内外：回転ナデ 底部：回転ヘラケズリの後ナデ
7	杯身	12.2		4.4	灰赤色	内外：回転ナデ 底部：回転ヘラケズリ
8	杯身	13.3		4.4	灰黄色	内外：回転ナデ 底部：回転ヘラケズリ
9	杯身	13.1		4.0	にぶい赤褐色	内外：回転ナデ 底部：回転ヘラケズリ
10	杯身	14.0		4.1	灰白色	内外：回転ナデ 底部：回転ヘラケズリ
11	短頭壺	5.2		5.8	灰黄色	内 口縁部 底部：ナデ 外体部：ヨコナデ
12	短頭壺	6.6		8.7	赤褐色	内外：ヨコナデ 底部：回転ヘラケズリ
13	甕	10.0		13.5	黄橙色	内：ヘラケズリ 外：ハケ目 口縁部：ナデ
14	脚付椀	10.9			橙色	内外：ナデ 接合部外：指頭圧痕
15	脚付椀	12.1	10.4	8.1	橙色	
16	脚付椀	11.8	11.2	8.3	赤褐色	内外：ナデ
17	脚付椀	12.3	11.9	8.0	赤色	内外：ナデ 脚部外：指頭圧痕
18	脚付椀	12.4	11.6	8.4	橙色	内外：ナデ
19	高杯	13.7	10.8	9.5	明赤褐色	内外：ナデ 脚部外：指頭圧痕
20	高杯	14.2	11.5	10.1	橙色	内外：ナデ 脚部内外：指頭圧痕
21	高杯	13.8	11.7	9.6	明赤褐色	内外：ナデ 脚部内外：指頭圧痕
22	高杯	(13.0)	11.0	(9.1)	橙色	
23	高杯	14.2	12.1	10.1	赤色	内外：ナデ 脚部内：指頭圧痕

表1 中山横穴墓遺物観察表



写真図版1 中山横穴墓出土遺物（1）



14



19



15



20



16



21



17



22



18



23

写真図版2 中山横穴墓出土遺物（2）



発見時状況（北西から）



発見時玄室内（北西から）

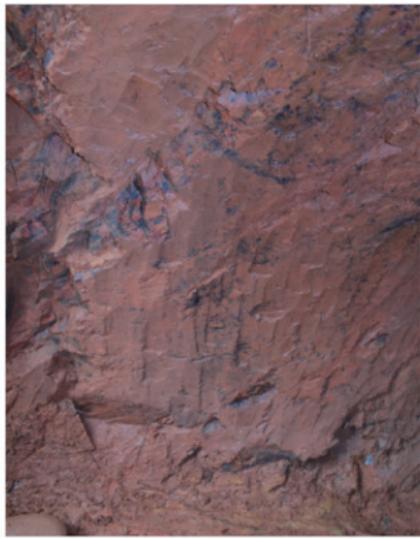


玄室清掃後（北西から）

写真図版3 中山横穴墓調査写真（1）



閉塞部（東から）



玄室の加工痕

写真図版4 中山横穴墓調査写真（2）



外観（東から）



羨道から玄室内（東から）



羨道部分（西から）

写真図版5 茶臼山古墳現況

#### 4. 観音免古墳測量調査

- a. 測量地 津山市神代 1,501-1 番地
- b. 測量期間 平成 26 年 10 月 3 日～平成 26 年 11 月 14 日
- c. 面積 約 900m<sup>2</sup>
- d. 調査の概要

津山市においては、市町村合併に伴い、旧町村の指定文化財についてはすべて津山市指定文化財として引き継ぎだ。新たに市指定に加わった古墳（群）19 件については、このうちのほとんどに墳丘測量図が無いなど基礎資料が不足している状況であった。

このため、これらの古墳（群）の基礎資料作成の一環として、墳丘測量図の作成を目的とした測量調査を平成 22 年度から平成 29 年度の計画で実施している。5 次目にある平成 26 年度については、観音免古墳ほか 2 か所の測量調査を実施した。

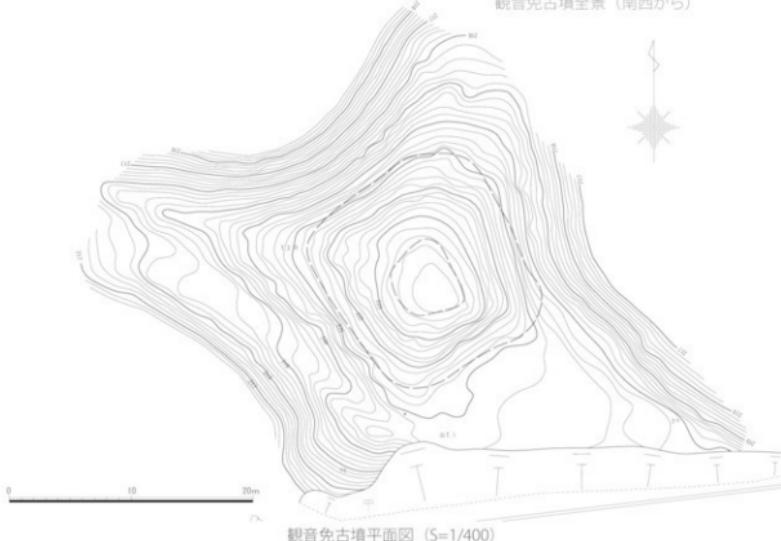
観音免古墳は、津山市神代地内に所在する。従来の見解では、一辺 17 m、高さ 3 m の方墳とされていた。調査は、市有地であるため担当課の許可を得たうえ、平成 26 年 10 月に実施した。測量作業上障害となる立木は管理団体により伐採されていたため、現地踏査



遺跡位置図



観音免古墳全景（南西から）



を行って測量範囲の設定を行い、市教育委員会職員が現地での立会指示を行って測量作業を実施した。

測量調査の成果については前ページ図のとおりである。測量調査を踏まえた所見としては、親音免古墳は一辺 16 m、高さ 2.6 m の規模の方墳であるが、やや地形の制約を受けた築造がなされている状況が確認された。なお、調査中に遺物は確認されなかった。

(仁木康治)

## 5. 七つ塚古墳群測量調査

a. 測量地 津山市戸脇 190-1 番地

b. 測量期間

平成 27 年 2 月 2 日～平成 27 年 3 月 20 日

c. 面積 約 2,500m<sup>2</sup>

d. 調査の概要

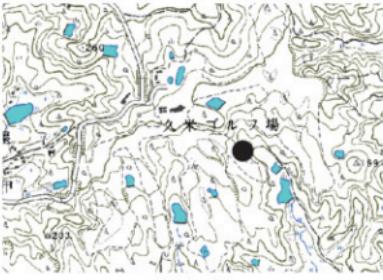
七つ塚古墳群は、津山市戸脇地内に所在する径 9～18 m の円墳 8 基で構成される古墳群である。江戸期の地誌である『作陽誌』にも記述があり、当時から七つ塚の名称で呼ばれていたことがわかる。石材採取のため大小規模の破壊を受けたことから墳丘が完存するものではなく、比較的良好に残るものが 1 基のみであった。

調査は、ゴルフ場のコース内であるため、事前にゴルフ場運営会社と協議を行って実施時期を定めて立入許可を得、平成 27 年 2 月に実施した。事前に作業の障害となる立木の簡易な伐採等を行い、市教育委員会職員の現地での立会指示のもと測量作業を実施した。

測量調査の成果については別添図のとおりである。測量調査を踏まえた所見としては、七つ塚古墳群については、現地で容易に墳丘を現認できるものは 4 基にとどまる。それ以外は辛うじて古墳の墳丘とみられる地形が観察できる程度で、古墳群としては認められるものの個々の残存状況はあまりよくないことが判明した。

ただし、古墳群としてのありかたについては、測量図の作成によってこの地域の典型的な後期の古墳群の資料として残すことができたことが成果としてあげられる。なお、調査中に遺物は確認されなかった。

(仁木康治)



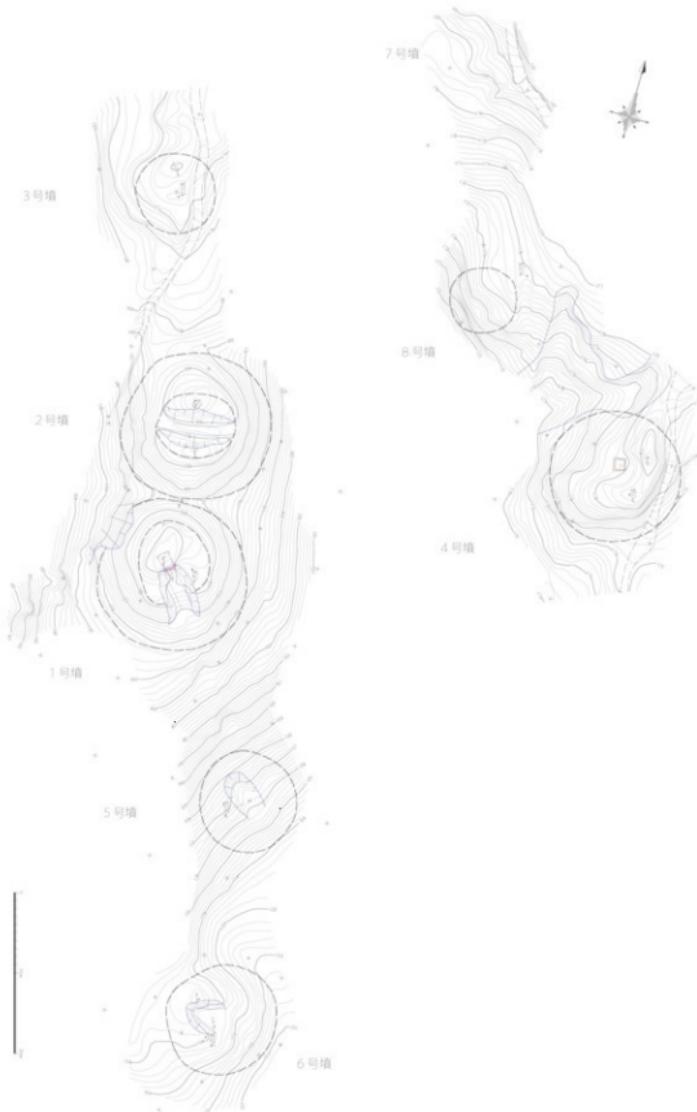
遺跡位置図



七つ塚古墳群全景（北から）



4 号墳墳丘に設置された石碑



七つ塚古墳群平面図 (S=1/600)

## 6. 大沢古墳 5号測量調査

- a. 測量地 津山市久米川南 1111-1 番地
- b. 測量期間 平成 27 年 2 月 18 日～平成 27 年 3 月 20 日
- c. 面積 約 400m<sup>2</sup>
- d. 調査の概要

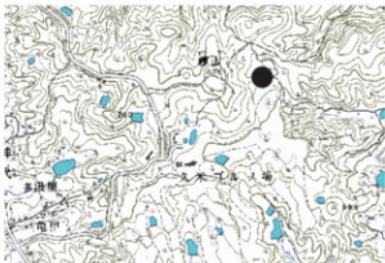
大沢古墳 5 号は、津山市久米川南地内に所在する。周辺に数基の古墳が所在し、一群を形成する。従来の見解では、径 9m の谷側に開口する横穴式石室を内部主体とする円墳とされていた。

調査は、市有地であるため管理担当課の許可を得たうえ、平成 27 年 2 月に実施した。事前に測量作業の障害となる草刈、簡易な伐採を行い、市教育委員会職員の現地での立会及び指示のもと測量作業を実施した。なお、本市においては、旧町村から引き継いだ指定文化財のうち、旧町村の指定名称で既に一般に周知されているものについては旧指定名称をそのまま使用している。本墳については、遺跡地図記載の名称すなわち文化財保護法上の公式名称は、「大沢 5 号墳」であるが、指定文化財としての名称は「大沢古墳 5 号」である。

測量調査の成果については別添図のとおりである。

測量調査を踏まえた

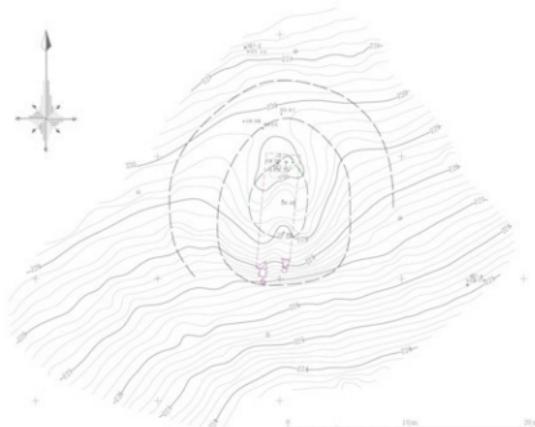
所見としては、大沢古墳 5 号は円墳であるが、墳形は長径 13m、短径 11m の横円形を呈するとみられる。なお、図中の石室規模については現況からの推定である。調査中に遺物等は確認されなかつた。  
（仁木康治）



遺跡位置図



大沢古墳 5 号全景（南から）



大沢古墳 5 号平面図 (S=1/400)

## 戸島男戸島西遺跡発掘調査報告

事業名 太陽光発電施設建設に伴う埋蔵文化財  
発掘調査  
遺跡名 戸島男戸島西（としまおんじしまにし）遺跡  
所在地 津山市戸島 974 ほか

### 調査の概要

#### はじめに

津山市戸島 794 番地ほかにおいて、太陽光発電施設の建設が計画され、この建設予定地が埋蔵文化財包蔵地（遺跡名：戸島男戸島西遺跡）に該当するため、平成 26 年 4 月 25 日から 4 月 28 日にかけて確認調査を行った。その結果、遺構の存在が確認されたため、5 月 23 日から 7 月 11 日にかけて、作業員 4 名（池内 啓治 稲所昭生 藤田和男 前田博文）及び文化財センター職員で、発掘調査を実施した。調査面積は約 420m<sup>2</sup>で、その概要是以下のとおりである。なお、調査経費は開発者の負担によるものである。

#### 周辺の弥生時代の遺跡

当地付近では、二宮大成遺跡、大間遺跡（弥生時代後期の住居址から板状鉄斧が出土）二宮遺跡、アモウ

ラ遺跡、有元遺跡、男戸島遺跡などがあり、丘陵上に集落が営まれる例が多く見受けられる。

#### 調査位置と立地（第 1 図）

戸島男戸島西遺跡は、鏡野町と接する丘陵からのびる舌状尾根の先端部に位置し、尾根の西側の谷は水田として利用されていたようである。今回の開発予定地については、過去の開発事業によって既にその多くが造成などの削平を受けており、本調査対象地周辺のみがかろうじて残存している状況であった。

なお、尾根東側については、現地での確認の結果、急峻な地形であること等から、今回の調査対象とはしていない。

#### 調査概要

検出した遺構は、住居 2、土坑 15 及び柱穴 9 である。（第 2 図）

#### （住居）（第 3 図・第 5 図）

住居は、第 3 図のとおり、新旧 2 つの住居が重なり合った状態で検出された。2 つの住居の切りあい関係から住居 1 が古く、住居 2 が新しいものと判断をした。

ほぼ完全な形で検出した住居 2 は、平面形が南北 5.56 m、東西 5.60 m の隅丸方形をしており、深さは最も残りの良い場所で約 54cm を測る。床面積は、20.2m<sup>2</sup>である。柱穴は、四隅に径 40 ~ 52cm で深さ 52 ~ 67cm の規模のもの 4 基と、それらの中間に径 18 ~ 30cm で深さ約 20cm の前者に比べ規模の小さい 4 基の計 8 基で構成されている。四隅の柱間の距離は、南北で 3.3 m、東西で 3.2 m である。また、住居の壁際には、幅 8.5 ~ 26.5cm、深さ 8 ~ 13.3cm の壁体溝がめぐっている。さらに、住居床面中央部では、径約 70cm、深さ 74cm の隅丸方形をした土坑を検出した。出土遺物のうちで図示できた住居 2 南西部の埋め土内から出土した敲形器台 9 は、内外面にヨコナデを施している。弥生時代後期後葉から古墳時代初頭のものであろう。

#### （土坑）（第 4 図・第 5 図）

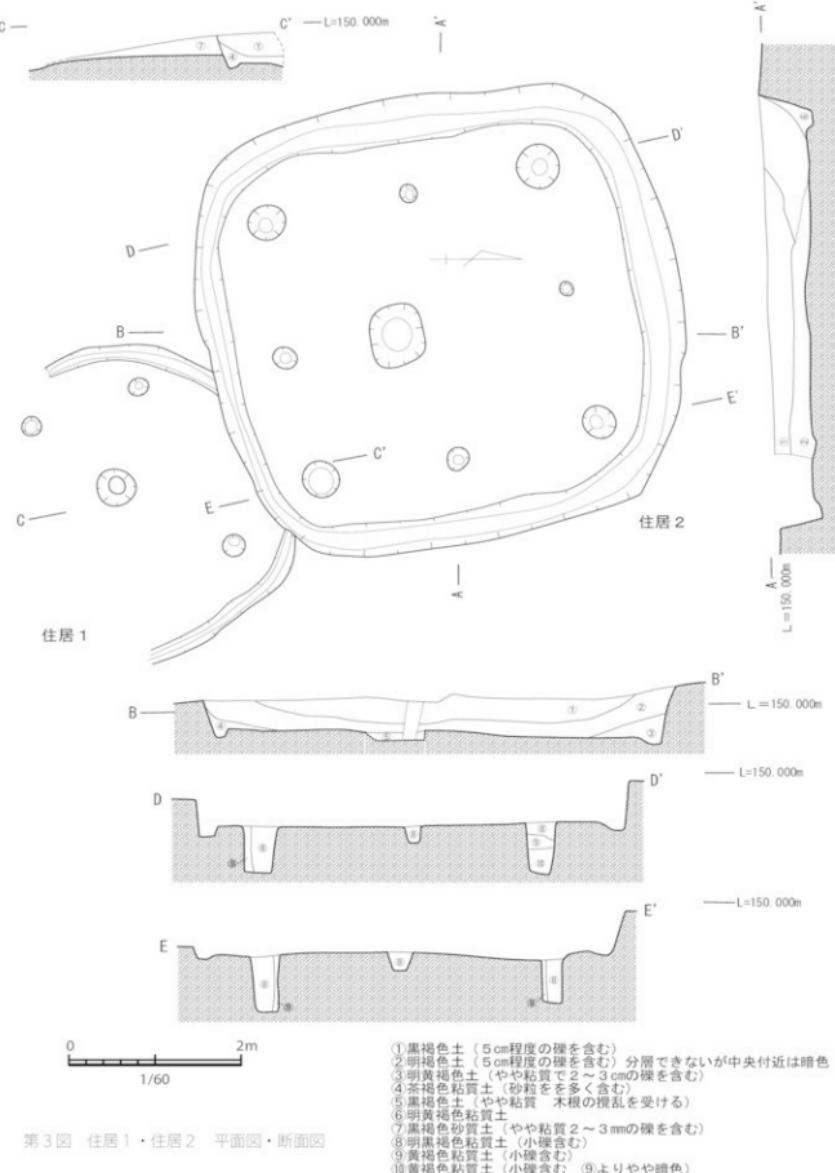


1 戸島男戸島西遺跡 2 男戸島遺跡 3 鹿神所遺跡 4 有元遺跡  
5 男戸島古墳 6 有本道跡 7~13 有本1~5号墳 14~22 田畠丸山1~9号墳

第 1 図 戸島男戸島西遺跡と周辺の遺跡 (S=1/15000)



第2図 戸島男戸島西遺跡遺構配置図



第3図 住居1・住居2 平面図・断面図

土坑については、多くは貯蔵穴と考えられ、土坑3・6・10・11・12・14・15からは土器が出土している。主な器種は甕でありいずれも埋土内からの出土である。そのうち図示できたのは、土坑6の甕4、土坑11の手づくね土器1、甕7・8・10及び土坑15の高环2、甕3・6である。

#### 土坑6

平面形が長径147cm×短径118cmの楕円形の土坑で検出面からの深さは40cmである。甕4は口径14.6cmで、外反した口縁部の端部が肥厚し、凹線文を施している。弥生時代後期後葉の頃のものであろう。

#### 土坑11

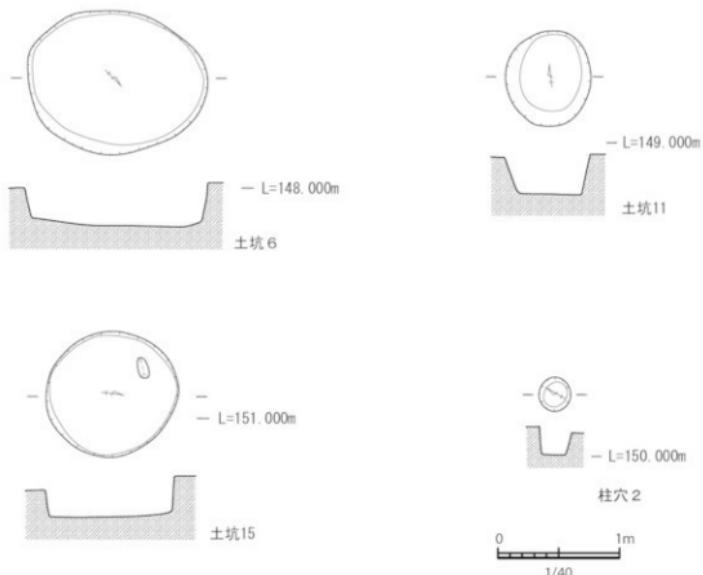
平面形が長径79cm×短径68cmの正円に近い円形の土坑で検出面からの深さは30cmである。出土遺物の内、手づくね土器1は、口径9.0cm、器高7.3cmで内外面に指頭圧痕が残る。甕10は口径17.1cm、最大径38.0cm、器高34.5cmで口縁部はヨコナデ、胴部外面は摩耗しているもののハケ目が確認できる。弥生時代後期後葉のものと考えられる。他に出土している甕7・8も同様に弥生時代後期後葉のものである。

#### 土坑15

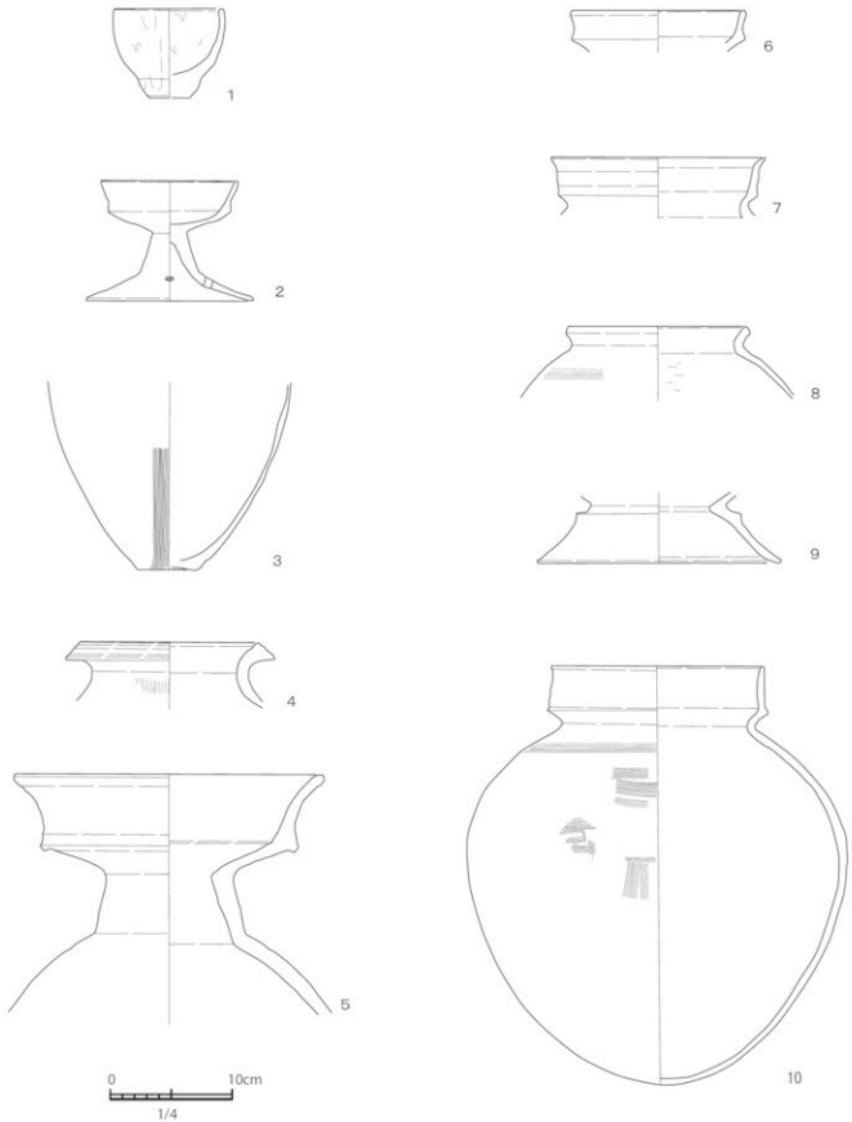
平面形が長径105cm×短径100cmの正円に近い円形の土坑で検出面からの深さは29cmである。出土遺物の内高环2は、口縁部外反の形状が受部からあまり外反せずひいている。調整については全体的に摩耗が著しく判断しない。弥生時代後期後葉から古墳時代初頭にかけてのものであろう。

(柱穴) (第4図・第5図)

柱穴については、出土遺物から弥生時代後期から古墳時代初頭のものと考えられる小穴を複数検出しているが、大きさや深さなど規模が一樣でなく、すべてが柱穴とは考えられないが、柱穴として取り扱った。柱穴2、



第4図 土坑6・11・15 柱穴2 平面・断面図



第5図 出土遺物

9からは土器が出土しており、主な器種は、甕、壺、鼓形器台である。

#### 柱穴 2

平面形が長径 28cm×短径 24cm の正円に近い円形の土坑で検出面からの深さは 16cm である。出土遺物の壺 5 は、口縁端部をつまみあげ、外面をナデている。弥生時代後期後葉から古墳時代初頭にかけてのものであろう。

#### まとめ

今回の調査では、まず、新旧 2 つの時期の住居跡を検出した。具体的な時期差は明らかにできなかったが、ある程度の期間集落が機能していたことがうかがえる。ただ、調査地周辺では、過去数度にわたる開発や地形的な問題もあり、本調査や本調査に先立って行った確認調査でも他に集落やそれに関連する遺構は見つかっていないため、集落の広がりなどを明らかにすることはできなかった。

土坑、柱穴については、出土遺物から住居が存在した時期（住居 2、弥生時代後期後葉から古墳時代初頭）と大差ないと判断されるため、住居と関連する遺構と考えて差し支えないと考えられる。

（平井泰明）



調査前（南東から）



住居 1・2（東から）



住居 2（東から）

写真図版 1

住居1（東から）



調査風景



遺跡全景（調査後・南から）



写真図版2



調査後（南から）



戸島男戸島西遺跡出土遺物

写真図版 3

## 美作国府跡確認調査 一都市計画道路総社川崎線整備事業に伴う埋蔵文化財調査一

a 調査地 津山市山北

b 調査期間

平成 26 年 10 月 7 日～平成 26 年 11 月 18 日

c 調査面積 33.5m<sup>2</sup>

d 調査の概要

都市計画道路総社川崎線整備事業に伴い、津山市山北地内の周知の埋蔵文化財包含地「美作国府跡」に該当する部分の遺構の有無等を確認するため、確認調査を行った。調査日数は 11 日である。調査は、国府域と推定される台地を下った低地にトレンチを 5 か所設定し、それぞれ西から順にトレンチ 1～5 とした。

### トレンチ 1

国府域と推定される台地を下った低地の西端に設定した 2 m × 5 m のトレンチである。厚さ約 80cm の造成土及び厚さ 10cm 未満の層（旧耕作土か）を取り除くと包含層が確認でき、極小の土師質の土器数片が出土した。更にトレンチ西側では、この層の約 20cm 下から、岩盤を確認した。更に掘り進めても岩盤層に変化が見られなかった。遺構は確認されていない。



第 1 図 調査位置図

「美作国府跡 小田中道跡 山北道跡」『岡山県埋蔵文化財調査報告』228  
より引用



第 2 図 トレンチ配図図(番号はトレンチ番号) 0 100m  
1/3500

### トレンチ 2

トレンチ 1 の西約 25 m の場所に設定した 2.5 m × 5 m のトレンチである。厚さ約 80cm の造成土及び旧耕作土のものと思われる 2 つの層（約 20cm）を取り除くと包含層が確認でき、極小の土師器、須恵器、勝間田焼及び瓦片が出土した。更にこの層の約 110cm 下から、黄褐色粘質土層を確認した。トレンチ 1 では確認できなかつたが、本来はこの層が基盤層であろう。更にその下層でトレンチ 1 同様、岩盤を確認した。遺構は確認されていない。

### トレンチ 3

トレンチ 2 の西約 20 m、現況でトレンチ 2 より 120cm 下

がった場所に設定した 15 m × 3 m のトレンチである。造成土及び耕作土と考えられる層を約 120 cm 程度掘り下げると、トレンチ 1 及び 2 と同様の包含層が確認できたが遺物は出土していない。更に地上から 2 m まで掘り下げを行ったが、基盤層と考える黄褐色粘質土層及び岩盤は検出できなかった。遺構は確認されていない。

#### トレンチ 4

トレンチ 3 の西約 45 m に設定した 1.5 m × 3 m のトレンチである。造成土を約 120 cm 掘り下げるとトレンチ 1、2 及び 3 と同様の包含層が確認できたが遺物は出土していない。更に地上から 1.8 m まで掘り下げを行ったが、基盤層と考える黄褐色粘質土層及び岩盤は検出できなかった。遺構は確認されていない。

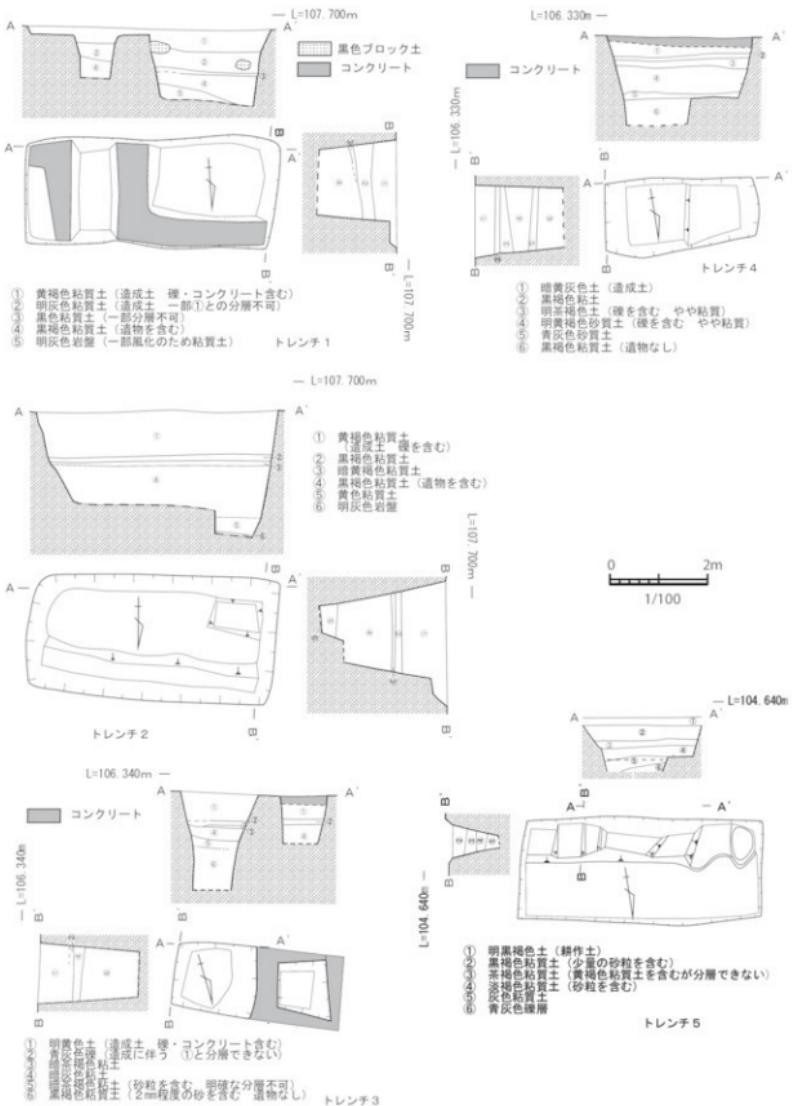
#### トレンチ 5

トレンチ 4 の北東約 30 m、現況でトレンチ 4 より 160 cm 下がった場所に設定した 2 m × 5 m のトレンチである。耕作土を除去すると、包含層が確認できたが遺物は出土していない。この層を除去すると基盤層と考えられる黄褐色粘質土を含む層が確認でき、更に 40 cm 程度掘り下げると硬層が確認できた。遺構は確認されていない。

#### e まとめ

今回の確認調査では、トレンチ 1 及び 2 で包含層からの遺物を検出したが、遺構は確認できなかった。トレンチ 3 ~ 5 では、遺構及び遺物ともに確認されていない。平成 22 年度に実施をした確認調査の結果も踏まえて、国府城と推定される台地を下った低地部分においては、国府に関連する遺構は存しないと判断される。

(平井泰明)



第3図 トレンチ平面図・断面図



トレンチ1（北から）



トレンチ2（北から）



トレンチ3（北から）



トレンチ4（北から）



トレンチ5（北から）



作業状況（トレンチ5 南西から）



調査区全景（西から）

写真図版

第Ⅲ部  
文化財の保護・管理



## A. 文化財の保護

### 1. 文化財保護委員会（委員 12 名）

第1回：8月 28 日 第2回：3月 31 日

### 2. 新指定・選定の文化財

#### 《市指定文化財》

徳守神社の鉄盾（9月 25 日付け）

### 3. 文化財防火訓練

1月 25 日 阿波八幡神社



徳守神社の鉄盾



文化財防火訓練

### 津山城跡の保存整備事業

・裏鉄門下雁木整備工事 東側石垣変位計測

・「津山城だよりNo 19」の発行

・冠木門跡発掘調査

・整備委員会（委員 6 名）

第36回（8月 27 日）第37回（3月 31 日）

#### 《史跡の管理、草刈等》

美和山古墳群の管理・草刈・剪定、三成古墳の草

刈、院庄館跡の管理・草刈

#### 《有形民俗文化財の防災点検》

田熊の舞台防災設備保守点検

### 2. 県指定文化財

#### 《史跡の草刈等》

日上天王山古墳草刈・日上畠山古墳群草刈・久米

廐寺跡草刈・矢筈城跡草刈・岩屋城跡草刈

#### 《建造物の修理補助》

高野神社本殿部分修理

#### 《無形民俗文化財への補助》

新野まつり、八幡神社・物見神社の花祭り、高田  
神社の獅子舞保存伝承補助



高野神社本殿修理

## B. 指定文化財の保存管理

### 1. 国指定文化財

#### 《建造物の修理等》

中山神社・鶴山八幡神社・總社防災設備保守点検

#### 《史跡の公有化、整備》

美作国分寺跡の公有化事業（10年次）

・土地 2 箬の購入及び公有地管理

・地元説明会の開催（3月 29 日）

### 3. 市指定文化財

#### 《史跡の草刈等》

沼遺跡草刈・剪定、井口車塚古墳草刈、中宮 1

号墳草刈、国分寺飯塚古墳草刈、正仙塚古墳草刈、

煙硝藏跡草刈、茶屋の一里塚伐採、神楽尾城跡草

刈、荒神山城跡草刈、医王山城跡草刈、西登山金

屋寺草刈、河辺上之町柳形草刈

### 《天然記念物の管理》

宇那堤森のムクノキ修理補助（樹木医による治療）



宇那堤森のムクノキ



津山やよいライオンズクラブによる草刈奉仕作業

### 《説明板の設置等》

大隅神社説明板張替修理

### 4. その他の文化財

津山中核工業団地内古墳公園（一貫東1号墳）草刈

### C. 歴史民俗資料館の管理運営

#### 1. 加茂町歴史民俗資料館

利用者数 132人

社会福祉法人津山市社会福祉協議会（加茂町福祉センター）に管理を委託

#### 2. 勝北歴史民俗資料館

利用者数 143人

消防用設備保守管理委託、清掃・燐蒸・整理作業

#### 3. 久米歴史民俗資料館・民具館

利用者数 55人

消防用設備保守管理委託

#### 4. 阿波民具館

利用者数 把握できず

### D. その他

津山やよいライオンズクラブによる沼遺跡草刈奉仕  
作業（8月6日）

第IV部  
資料紹介・研究ノート



## 『津山城本丸御殿絵図』の検討

乾 貴子

はじめに

津山城本丸御殿は文化六年の大火灾で焼失、翌七年に再建された。この大火の前年と翌年に藩の作事所が作成した本丸御殿の指図が残っている。それが文化五年成立の『御城御座敷向想絵図 文化五戊辰年八月日 御作所』（以下、『文化五年図』、図1）と、同七年成立の『津山城之図（文化七年庚午御普請出來之図）』（以下、『文化七年図』）である（注1）。両絵図は火災前後の津山城の本丸御殿の平面図として最も重要な史料となっている。

ここで取上げる津山郷土博物館所蔵の『津山城本丸御殿絵図』（以下、『御殿絵図』、図2）は、旧津山松平藩に仕えた重臣の家に伝来したとされる絵図である。絵図の来歴と内容から判断して、史料価値は比較的高く、『津山城資料編 解説』（津山市教育委員会、2002年）によると、「重臣の家に伝來した絵図のようであるが、正確な図面とは言い難い」のが、「内容的にはかなりしきりとしていて、元図としては正確な図面があったものと思われる」としている。確かに、文献史料と照合させると、同絵図の内容は、18世紀後半頃の藩の記録とも合致している（注2）。とはいっても、同絵図について精査した研究はない。そこで、本稿では史料批判を行い、同絵図成立の背景と意義について考察したい。

### 1. 絵図の来歴について

『御殿絵図』の端には、次のような来歴が認められている。

「維時 昭和二十六年十一月二十日 大橋静夫氏夫人信子女より譲與せられしものを文化の日（昭和天皇御誕生日佳日）に之を津山郷土館に寄贈するものなり

昭和天皇二十八年十一月三日

津山市上之町本蓮寺住職

三田村光道（花押）

それによると、昭和二十六年（1951）に大橋静夫氏の妻の信子氏から、城下の上之町にある本蓮寺（日蓮宗）の三田村光道住職に同絵図が譲与され、その二年後の同二十八年に津山郷土館に寄贈したとある。

まず、大橋家について。『津山城資料編解説』で「重

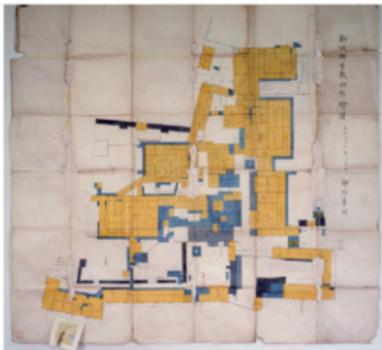


図1『御城御座敷向想絵図 文化五戊辰年八月日  
御作所』 134.5 × 125.5cm



図2『津山城本丸御殿絵図』津山郷土博物館所蔵  
201.0 × 157.0cm

臣の家」と推定するように、津山松平藩の御譜代家の大橋家と思われる。津山松平藩が藩士の履歴を編纂した、通称『勤書』（津山郷土博物館所蔵、愛山文庫史

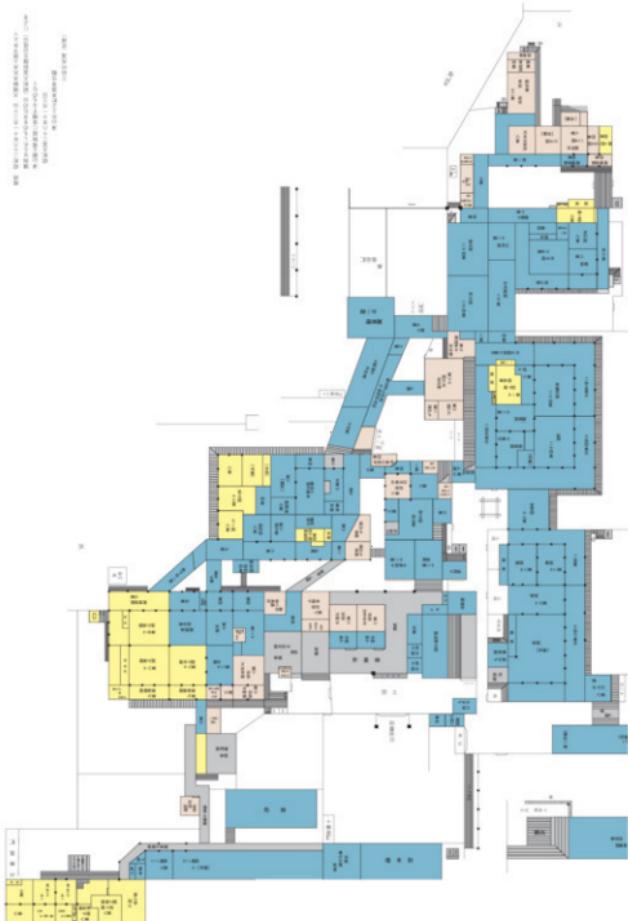


図3 『津山城本丸御殿絵図』書き起こし

料)と呼ばれる史料によると、同家は松平家が津山藩に入封する以前の貞享五年(1688、同年「元禄」に改元)に松平家に召出されている。以降、大橋家は代々大番頭、御奏者番、年寄役等の要職を勤め、家禄は三百五十石としている(注3)。(『勤書』簡易版、『御講代家』愛山文庫D 3-1~3・4・6)。なお、文政期頃の同家当主について、『勤書』には「文政元戌寅

八月廿五日勤向思召\_不相叶、其上御内密之義、御留守居正様々相尋候由、重々不埒、役儀御免」と記載している。同絵図の成立に直接的に関わる記述ではないが、当時の当主であった大橋十太夫(隠居後、「仰山」と号す)は、藩の機密事項に強い関心を寄せていた様子がうかがえ、興味深い。

次に、『御殿絵図』の寄贈を受けた「津山郷土館」



図4 『御城御座敷向物繪圖 文化五戌辰年八月日 御作事所』書き起こし

について。同館は昭和二十六年(1951)十一月三日(文化の日)に津山市が設立した歴史展示施設である。城下の南新座にある第三十五代内閣總理大臣・平沼騏一郎別邸(現在の国の有形登録文化財「知新館」)を利用したもので、同六十三年に津山郷土博物館が開設により閉館している<sup>(注4)</sup>。したがって、ちょうど同館の開設から二年後に同絵図の寄贈を受けていたことになる。なお、大橋家は『御殿絵図』とともに『津山城下町絵図』(津山郷土博物館所蔵)、『津山城資料編』掲載)も寄贈しており、この城下町図には、『御殿絵図』と全く同じ文面の来歴が墨書きされている。ただし、「大橋家蔵書」の蔵書印が押印されているが、『御殿絵図』の方にはこの蔵書印は押されていない。この二つの絵

図の墨書きからは、御譜代家の一つである大橋家に津山城の本丸御殿絵図と城下町絵図とが伝わっていたことがわかる。

## 2. 作事所作成『文化五年図』との比較

『御殿絵図』が描く本丸御殿は、建物の位置関係を忠実に再現していないが、座敷の名称や畳数等の書き込みについては藩の作事所が作成した『文化五年図』とほぼ一致している(図1~4)。ある程度、正確に描かれた絵図と思われる。しかし、『御殿絵図』には、『文化五年図』や他の絵図には描かれていない独自の描写が見られる。その一つが、他の絵図には見られない建物が二棟描かれている点である。この描写が他の絵図

には見られないことは、同絵図の史料としての信憑性に疑問を投げかけている。その他の絵図には描かれていない二棟の建物とは、書院の北に描かれている一棟と、長局の北に描かれている一棟である。以下、これらの建物の実在性について検討するが、その前に、同絵図に見られる表現技法上の特色について検討しておきたい。

まず、着色の仕方について。『御殿絵図』では青灰色（脛）・薄黒色（板敷）・無色（土間）・黄色（藩主の着座間と居室）・白色（役所部屋）と分類しているように思われる。このような色分けで津山城を描いた絵図は他には見られない。ちなみに、津山松平藩の作事方が作成した絵図では、脛の間は黄色、板敷は墨色といった色分けで着色が施されている。

次に、建物の配置について。『御殿絵図』では、建物はすべて一律にまっすぐに並ぶように描かれている。ところが、実際の建物配置は、作事方が作成した『文化五年図』のように南北の軸が一定に保たれていない（図5）。例をあげると、

（一）玄関建物は同絵図では本丸御殿と対して平行に並んで建っているように描かれているが、実際には南北の軸が北東に振っている。

（二）裏鉄御門付近の石垣の位置の描き方も概念的である。『御殿絵図』では裏鉄御門石垣の北側の石垣が同門や本丸御殿と直角に交わるように描かれているが、実際には少し南北の軸が北東に振っているため、直交していない、などである。

また、二階を示す位置も不正確である。例えば、備中櫓二階は、『御殿絵図』が示す場所より実際には西寄りである点や、腰巻櫓および主殿は二階建てであるが、二階については説明がないなどといった点である。こうした相違点から同絵図の描写における曖昧さが指摘できる。また、絵図の描写には精粗の差も目立つ。その一例が柱の描写で、柱配置を詳しく描いた箇所と、そうではない箇所が見られる。全体的な傾向としては、表向の諸座敷については柱の配置が詳細に描かれているが、奥向きの柱配置の描写はやや粗雑であるように思われる。ただし、襖や障子等の建具の描写は詳細で、赤色を用いた勢いのある筆遣いで、強調して描いている（図5）。特に、違棚・階段欄干の描き方は、絵図にしては説明的であり、意匠の一つ一つに注意を払って描いている（図6-1・2）。

各座敷に記している脛数や部屋の名称については作事所作成の『文化五年図』と比べて大きな違いはない。ただ、脛数に異同が14ヶ所ある。部屋の名称には異同はあるまいられない。ただし、やや『御殿絵図』の方が、役所部屋の名称を詳細に記載しており、「惣供侍」・「炭部屋」・「油部屋」・「うをや部屋」・「八百屋部屋」など、『文化五年図』には無い部屋の名称が見られる（図7-1）。どちらかというと、作事方作成の『文化五年図』は御殿表向きの部屋の名称が詳しく記されているが、役所部屋の名称については『御殿絵図』の方が詳しいように思われる。例えば、『文化五年図』では大書院に「千鳥之間」という名の座敷が見られるが、『御殿絵図』ではこの部屋の名称の記載がなく、「二脛」・「四脛」の二部屋となっている（図7-2）。なお、『御殿絵図』のみに見られる座敷の名称もある。それが主殿にある「雷之間」という座敷である（図7-3）。これは、『文化五年図』の方には記載が無い。

『御殿絵図』の表現技法上の特色について、もう一点あげておきたい。それは、場所により精粗の差がある点である。例えば本丸御殿の内部は場所によりかなり精細に描かれている一方、門・櫓などの付属施設については着色もなく、描写も簡略であるという点である。ただし、外回りの施設が全て大雑把に描いているのかといえば、そうではない。例えば、城の大手に位置する表鉄御門と握手の裏鉄御門に設けられた「こしかけ」は、丁寧に描かれている（図8-1・2）。

なお、『御殿絵図』では裏鉄門付近の「こしかけ」が描かれているが、文化六年に本丸御殿が炎上した時に焼失したため、『文化七年図』には記載が無い。

以上のように、『御殿絵図』の描写は正確であるとは言いたいが、内容的には作事方作成の『文化五年図』とほぼ同じであり、大きな異同はほとんど見られない。むしろ、御殿奥向については、『御殿絵図』の内容の方が詳細であり、役所部屋、藩主の居室、出座場所、供侍・腰掛や八百屋・魚屋部屋などにいたるまで、詳細に部屋の名称や室内的意匠等が書き込まれている。これらは作事所作成の絵図からは得られない情報である。

以上の諸点から、『御殿絵図』が作成された背景として、おそらく何らかの職務上の必要性から作成されたのではないかという推測が成立立つ。こうした性格

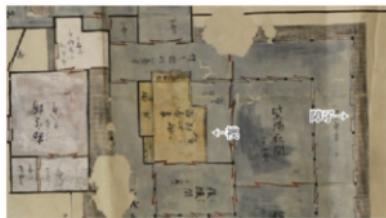


図5 『御殿絵図』より襖・障子（大書院紫陽花の間）

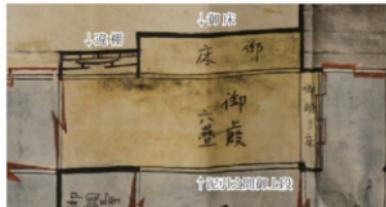


図6-1 『御殿絵図』より襖（小書院泥引之間）

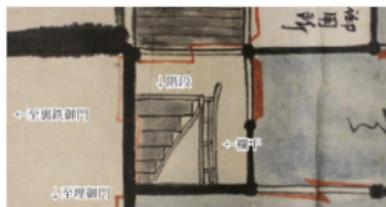


図6-2 『御殿絵図』より階段・櫻干（小書院上り口）

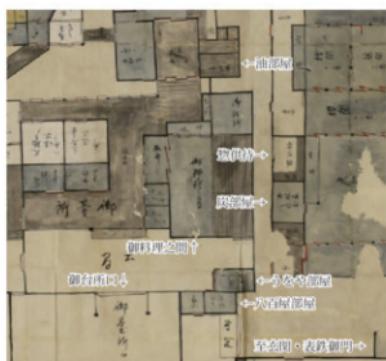


図7-1 『御殿絵図』より襖供侍・炭部屋・油部屋・うたわや部屋・八百屋部屋（御台所周辺）



図7-2 『御殿絵図』より（小書院二疊・四疊間）



図7-3 『御殿絵図』より（御殿奥向賀之間）



図8-1 『御殿絵図』より表鉄門付近（矢印は登城経路）



図8-2 『御殿絵図』より裏鉄御門付近（矢印は登城経路）

の絵図だからこそ、藩の公的な文書としてではなく、家筋としては上級の藩士である譜代の大橋家に私蔵されていたのではないかと思われる。

### 3. 藩の御用日記との照合

次に、作事方が作成した『文化五年図』には描かれていらない二棟の建物について検討を進めることにしたい。『御殿絵図』のみにしか描かれていない二棟の建物とは、小書院北方に描かれている御用所・御奉者役所・大目付役所・御右筆者役所などの主要な役所が入った建物と、長局の北方に書かれている「御局」である（図9-1・2）。以下、藩の記録をもとに、これらの建物が実在した可能性やその存続期間について検討する。

#### ①小書院北の建物

津山松平藩の延享三年（1746）の『国元日記』によると、七間廊下の「古御用所」を勘定奉行役所としたという記述が見られる。

#### 『国元日記』延享三年十一月八日条

一、七間廊下古御用所、只今勘定奉行役所相成候間、右段橋下より往来無之様、御座敷奉行へ可相達旨、大目付より中奥目付より達之

この「古御用所」は、おそらく七間廊下の脇にあつたと思われ、同所は『御殿絵図』では「勘定所物置」と「御用所供待」となっている。ただし、『文化五年図』を見ると、同所にはそのような記載は見られず、單に「拾貰」となっている（図10-1・2）。

同史料の「七間廊下古御用所」については、いつ、どこへ移転したのかがはっきりしない。ただ、御用所の移転から40年後の天明六年（1786）二月に、御用所の建物の「普請」が行われていることが、町奉行の御用日記からわかる。

#### 『町奉行日記』天明六年二月二十八日条

一、御用所御普請付、柳ノ間でい引間、御用所相成ル、大目所（大目付役所カ）山吹ノ間、御右筆役所 焚火之間、今日より所替り候

史料から、天明六年に「御用所普請」があり、御用所・

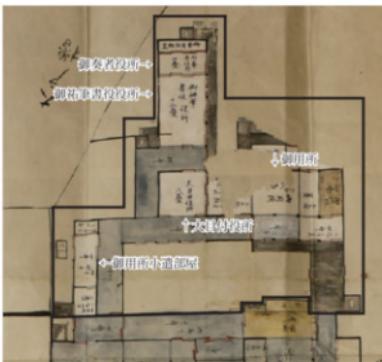


図9-1 『御殿絵図』より御用所（小書院北側）  
黒枠内が「御用所建物」（推定）



図9-2 『御殿絵図』より長局と御局（長局北側）

大目付役所・御右筆役所をそれぞれ小書院の櫓之間・泥引之間・山吹之間・焚火之間に移転していることがわかる。つまり、同史料は、御用所の改修工事に際して、諸役所を小書院に仮移転したことを表しているものと思われる。小書院に仮移転していることからみて、当時の御用所は小書院付近にあったものと考えられる（図11）。松平家が津山藩に入封した古い時期の絵図一例ええば、元禄十年（1697）頃成立の『津山絵図』（個人蔵、『津山城 資料編』掲載）や、享保十年（1725）成立の『津山御城絵図（乙巳年御目付江被指出候控）』（個人蔵、『津山城 資料編』掲載）などを見ると、小書院の北には土蔵のような建物が描かれている（図12-1・2）。



図10-1『御殿絵図』より勘定所と周辺の役所

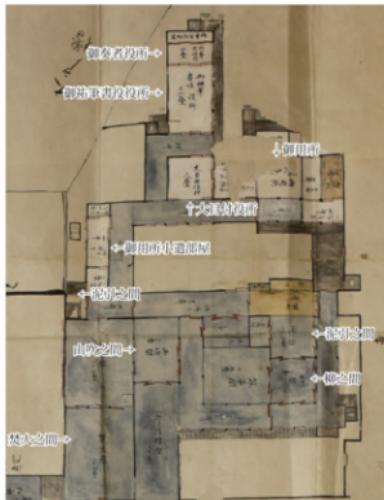


図11『御殿絵図』より長局と御局（長局北側）



図10-2『文化五年図』より勘定所と周辺の役所



図12-1『津山絵図』より長局と御局（長局北側）



図12-2『津山御城絵図』より長局と御局（長局北側）

御用所建物は、おそらくこの土蔵を取り壊して、その跡地に建てられたのである。このことは、文化三年（1806）の『勘定奉行日記』に、御用所建物を取り壊して、跡地に土蔵を再建したとの記録があることからもうかがえる。

#### 『勘定奉行日記』文化三年十一月十八日条

一、当時御用所建物不残書役所迄取扱、江戸御普請御入用之場へ取向、如初御土蔵取計可申候、御用所薄之間西之方、同所大目付役所其外書役所・坊主部屋等、先年之通、何相済候

この記録によると、普請にあたって御用所は薄之間の西の方へ、大目付役所・書役所・坊主部屋は「先年之通」へ移転させたことがわかる。史料中に「先年」とあるが、これはおそらく40年ほど前の天明六年の「御用所御普請」のことを指しているのである。この普請の際には、御用所以下の役所部屋を小書院に一時移転し、翌年に御用所建物の取り壊しに着手している。

#### 『勘定奉行日記』文化四年三月八日条

一、古御用所取崩今日迄取懸候間、吉田文左衛門届有之、其段大目付並相違之

この記述からは、「御用所建物」は延享三年に土蔵を取り壊して建てられ、天明六年に大改修が施されたが、文化四年に取り壊されることになり、跡地には土蔵が再建されたものと考えられる。なお、この土蔵は、文化六年に大火により本丸御殿を焼失した後に、藩が本丸御殿の再建を伺い出るために公儀に指出した『美作国津山城燒失付普請図絵図』に描かれている（図12-3）。したがって、同絵図中の土蔵は、先に示した古い時期の2点の絵図中の土蔵とは全く別の新しい土蔵と考えられる。

以上、小書院北方の建物の変遷を検討したが、少し複雑なので図表化した（図13）。この図表からわかるように、御用所建物が存続したのは、延享三年頃～文化四年頃という18世紀後半の50年余りの短期間であったことになる。

そこで、この時期の城内の様子について検討しておきたい。『御殿絵図』に描かれている時代は、第五代

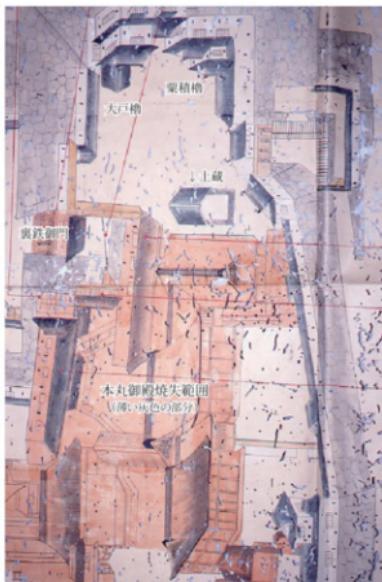


図12-3『美作国津山城焼失普請図絵図』（文化六年）

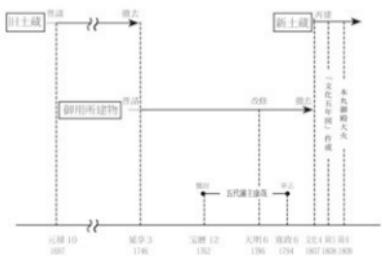


図13 御用所建物と小書院北方の土蔵の変遷

藩主康哉が藩を治めた時期にあたる。康哉は宝曆二年（1752）に江戸で出生、同十二年（1762）に家督を相続、寛政六年（1794）に卒去。歴代藩主のなかでも名君と称えられる人物であり、寛政の改革を進めた幕府老中・松平定信や、宝曆年間に藩政改革を行なった肥後熊本藩主・細川重賢と親交。また、後に老中・老中格として幕閣に取り立てられることになる丹波篠山藩主

松平信道・陸奥泉藩主本多忠勝・美濃大垣藩主戸田氏教らと定信を中心に政策グループを形成。政策論議を交わしつつ、宝暦から寛政年間にかけて自ら藩政に関わる形で藩政改革を行なっている（註6）。藩の日記によると、「御用所御普請」の記事が見られるのは天明六年（一七八六）。康哉が家督を相続した時期より16年ばかり早く建てられていたことになる。

康哉が家督を継ぎ、襲封したのが宝暦十二年（1762）。当時十歳とまだ幼年であったことからも、御用所の新造は先代の四代藩主長孝の時代から機構改革の動きがあったものと見られる。この御用所の建物の所在地は、日記からは知ることができないが、『御殿絵図』には御用所をはじめ、大目付・御祐筆・御奏者等の中枢部が集合する建物が、小書院の北側に描かれていることから、建物の場所や構造を窺い知ることができる。そうした意味でも、『御殿絵図』は、藩の行政機構の変化に伴う城内の空間構成の変容を伝える貴重な史料であるといえるだろう。

## ②長局北の建物

天明四年（1784）の『勘定奉行日記』に「長局新建物之処、今式間半程建廻」という記事が見られる。

『勘定奉行日記』天明四年二月廿三日条

一、長局新建物之処、今式間半程建廻被仰付候段、  
赤見類助被申聞其段御作事方へ申達ス

この「長局新建物」を増築したことを示す記述が、同絵図中の「御局」かどうかは不明である。ただ、「長局新建物」と呼ばれる建物が、「御用所建物」と同時

子息	出生地 出生年
祐千代（天道）	津山 天明元年（1781）
貞（天道）	津山 同 三年
康次（八代眞三）	江戸 同 六年（寛政六年）（1794）襲封
青季（七代眞三）	江戸 同 八年（文化二年）（1805）襲封
徳質	江戸 同 八年（文化二年）（1805）津山城へ移封
信立	江戸 寛政二年（1790）津山城上山城松平家へ養子・襲封
時敏（早田）	江戸 同 三年
柔（天道）	江戸 同 四年
周明	津山 同 五年（寛政五年）津山城松平家と養子継承
富丸（天道）	江戸 同 五年

図 15 五代藩主康哉の子息の生年・出生地  
(出典)『松平家御系図 越前家語略』  
矢吹金一郎編『津山温知会』第貳編(津山温知會、明治四十二年) 所収

期にあったことは間違いないと、同絵図はその状況を描いたものとなっている。したがって、同絵図に見える長局の北に描かれている建物は、天明四年（1784）の記録に見える「長局新建物」と推定される（図14-1）。そして、この建物は文化五年図に描かれていないので、およそ20年後の文化四～五年（1807～1808）頃に取り壊されたのではないかと考えられる（図14-2）。

そこで、「長局新建物」の新築や増築が続いた天明期の藩主一族の国元での出来事を辿ってみると、天明元年（1781）に嫡男の仙千代（秋光院）が誕生。続いて、同三年に長女の貞（貞鏡院）が出生している。ところが、まもなく同六年に長女の貞が享年四歳で亡くなり、次いで同八年に嫡男の仙千代も夭逝している（図15）。



図 14-1 『御殿絵図』より長局付近

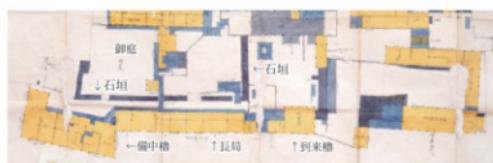


図 14-2 『文化五年図』より長局付近

とすると、「長局新建物」の増築工事が行われた天明四年は、ちょうど二人の子女が存命していた時期にあたることになる。なお、その後、國元で藩主の子息が生れるのは、寛政五年（1793）の用明（頸光院）の時である。用明は康哉の庶子として出生。旗本書院番の近藤用規（八百二十五石）と養子縁組している。

以上の史料から、絵図の「御局」は天明四年に増築された長局新建物と推定される。『文化五年図』にこの「御局」が描かれていないのは、まもなく撤去されたためであろう。なお、『文化五年図』には「御局」に該当する建物は描かれていないが、同じ場所には附属屋（便所か）が描かれている。これは、不要となつて撤去された「御局」の痕跡ではないかと考えられる。

#### おわりに

以上の検討から、『御殿絵図』は、五代藩主康哉による藩政改革が行われた18世紀後半成立のものであると推定した。すでに述べた通り、作事所が作成した本丸御殿の指図には、文化五年成立のものと、同七年成立のものが残る。この2点の絵図は本丸御殿が再建される直前と直後（本丸御殿は同六年に焼失し、翌年に再建）のものである。したがって、本稿で検討した『御殿絵図』は、『文化五年図』以前に成立した絵図ということになる。『御殿絵図』が成立した背景について考察すると、おそらく作事所で作成されたものではなく、諸役人らが手控えとして私的に所持したものではないかと考えられる。それは、『御殿絵図』が伝わった大橋家は、江戸時代中・後期かけて藩の御年寄や御奏者番などの要職を歴任した家であり、その身分と立場の高さから見て、本丸御殿の間取を十分に把握していた可能性が高いからである。

では、『御殿絵図』は、どういった絵図の類型にあてはまるのか。城絵図および城下町絵図を成立事情から大別すると、（一）藩が公儀に指出すために作事所が作成した国絵図、城絵図、城下町絵図などの絵図、（二）作事所以外の諸役人、例えば町奉行、寺社奉行、郡代などの諸役所が職務上の必要に応じて作成して手控えとした絵図、（三）大名家が家伝書を編纂するにあたって作成した絵図、（四）後世に複製された絵図（写本類）、（五）城や城下町の案内図、などがあるだろう。このうち、『御殿絵図』は（二）に該当する信頼できる史料であるといえる。一般的に、史料的価値が高い

のは一次史料である（一）や（二）であろう。それ以外は、興味深い内容のものであっても、来歴のはっきりしない絵図が少なくない。

そこで、翻って本稿で検討した『御殿絵図』の史料価値について整理しておきたい。

#### ①来歴

同絵図は、藩の譜代の家に城下町絵図とともに伝わる来歴の確かな絵図である。

#### ②描写的精度

同絵図は、作事所作成の指図のような精巧な図面ではないが、見取図としての精度は高く、文献史料とも合致する。

#### ③成立年代

藩の記録との照合から18世紀後半と考えられる。これは、ちょうど五代藩主松平康哉の新政が行われ、藩の行政機構が大きく再編された時期にあたる。

#### ④他の絵図との異同

同絵図には御用所を初めとする役所の中核部が、小書院の北方の建物に集約されていた様子がはっきりと描かれている。この建物は、他の本丸御殿絵図には見られないが、日記の記録から実在する建物であると推定される。

以上の点から、同絵図の信憑性は高いと考えられ、当時の本丸御殿の空間構成の変遷を追跡するうえで欠かせない貴重な史料と言えよう。

最後に、絵図の検討をおこなう研究意義について。本稿では『御殿絵図』を取り上げたが、津山城関係の絵図の伝存状況については、史跡整備に伴う文献史料調査および絵図の悉皆調査が実施されてほぼ確認作業が終了している。その成果として、城絵図および城下町絵図の写真と文献史料が、2000～2002年にかけて刊行された資料集及び同解説書に収録されている。また、その後は、発掘調査の成果も踏まえ、絵図についての個別的な検討も進められている<sup>(注7)</sup>。しかしながら、津山城跡の場合、考古学的データはかなり蓄積されている一方で、多くの城絵図および城下町絵図については、まだ検討の余地が残されている。近世考古学では文献史学の成果を踏まえた学際的な研究が進められていることからも<sup>(注8)</sup>、未検討の絵図について研究を継続する必要があるだろう。

## 《謝辞》

本稿の作成にあたって、津山郷土博物館学芸員 小島徹氏、津山市歴史まちづくり推進室 平岡正宏氏より御教示をいただきました。また、掲載した絵図の撮影につきましては、平岡氏に御協力をお願いいたしました。末筆ながら、厚く御礼申上げます。

## 【註】

- (1) 両絵図は『津山城 資料編』(津山市教育委員会、2000年)に写真が掲載されている。同書に掲載された絵図については、『津山資料編 解説』(津山市教育委員会、2002年)で解説がなされている。いずれも、津山城絵図・同城下町絵図および文献史料調査の成果をまとめたものであるが、このほかにも、『津山城 資料編』Ⅱ(津山市教育委員会、2001年)、『津山城 資料編 解説』(津山市教育委員会、2002年)、『津山城百闘録』(津山市、2009年)などがあり、津山城および城下町絵図についての検討がなされている。
- (2)『御殿絵図』の成立年代の特定は、すでに拙稿『津山松平藩の御用所について—寛政期以前一』『年報弥生の里』(第11号、2004年)で指摘している。
- (3)津山松平藩における家臣の身分・格式については、『津山市史』第五卷 近世Ⅲ—幕末維新—「第一章 明治維新と津山藩」(津山市、1974年)、小島徹「津山藩士の「勅書」に関する一考察」『津山郷土博物館紀要』第十一号(津山郷土博物館、1998年)、竹内知恵「津山藩家臣団の家系考」(『津山郷土館案内』第5号、1986年)で検討されている。
- (4)津山郷土館と津山郷土博物館の設立年月日については、『津山市史』第七巻現代2 大正・昭和時代「巻末年表」(津山市役所、1985年)参照。
- (5)本丸御殿の建物配置や構造については、『津山復元模型の制作過程』『津山郷土博物館紀要』第二号(津山郷土博物館、1990年)、三浦正幸『城の鑑賞基礎知識』(至文堂、1999年)182頁「355 津山城本丸門復元平面図(岡本祐二氏復元)」、「358 津山城 - 表鉄門復元平面図(岡本祐二氏復元)」、『史跡津山城跡保存整備計画』(津山市教育委員会、1999年)、『史跡津山城跡備中橋復元整備基本計画書』(津山市教育委員会、2000年)などで検討されている。
- (6)五代藩主松平康哉の新政については、『津山市史』第四巻 近世Ⅱ 松平藩時代「第一章 新領主松平氏」(津山市役所、1995年)参照。機構改革の詳細については、小島徹「二冊の安永二年『町奉行日記』」(『津山郷土博物館紀要』第十二号・津山松平藩町奉行日記』七、1999年)で解説されている。
- (7)『津山城百闘録』(前掲註1)、『津山城だより』№16「表中門の発掘調査を行ないました」(津山市教育委員会、2012年)、『同』№18「冠木門跡の発掘調査を実施しました」(同、2014年)、『同』№19「裏鉄門下雁木の整備を行ないました」(同、2015年)、拙稿「津山城本丸御殿の変容過程—『御城御座敷向懸船図面』の検討—」『年報弥生の里』第10号(津山弥生の里文化財センター、2005年)、同『津山松平藩の御用所について—寛政期以前一』『同』第11号(前掲註2)、同『津山城本丸御殿と表鉄御門の再建について』『同』第12号(同、2005年)、同『津山城天守指図に見える柱傾斜についての考察』(『同』第17号、2010年)等
- (8)近世考古学における文献史料との学際的な研究が抱いている研究手法上の問題点については、鈴木公雄「近世考古学の課題」(『村上徹君追悼論文集』、1988年)で指摘されている。また、岩淵令治「補論 日本近世考古学と文献史学」(『江戸武家地の研究』(瑞書房、2004年)で近世考古学の研究史が整理されている。

## 美作の狛犬（7）

田淵千香子

### はじめに

美作地域の狛犬を悉皆調査し始めてから、早7年目となった。現在402社を巡り、狛犬261対を確認することができ、新たな発見がいくつも出てきた。

今までにも何度か書いてきたが、美作地域には主に島根県の出雲型、大阪の狛犬、愛知県の岡崎型、広島県の尾道型など4種類の狛犬が入ってきており影響している。4種類の狛犬は、時代の流れの中で様々な展開を見せており、小稿では、美作地域の岡崎型狛犬について考察していきたい。

### 岡崎型狛犬について

岡崎型狛犬は、美作地域に限らず全国的にも多く分

布している狛犬である。岡崎型狛犬の特徴は、耳が横に伸び、蠍燭のように伸びた尻尾、姿勢は、座型であり、石材は、花崗岩であることが多い。

岡崎型は、一見すれば判断しやすい。これは、愛知県岡崎市で生まれた石工 酒井孫兵衛（6代目）が神殿狛犬の様式を現代風にアレンジして岡崎現代型の雛型を造り上げ割り寸など、この狛犬の「制作マニュアル」を自分の弟子のみならず、広く岡崎の石工たちに公開したため、あっという間に全国へ広まつた（註1）。

こうして、岡崎型狛犬は一定の様式を確立して広まつたため、様式から大きく逸脱したものは少ない。



(写真1) 福本神社(美作市福本)大正13年(1924) (写真2) 入江神社(西粟倉村大茅)昭和7年(1933)  
酒井孫兵衛 作者不明



(写真3) 米来神社(真庭市米来)昭和11年(1936) (写真4) 八幡神社(真庭市中原)昭和12年(1937)  
津之国 西宮石匠岡田石材店





(写真5) 高良神社(津山市押入)昭和14年(1939) (写真6) 五座神社(美作市豊国原)昭和15年(1940)  
石匠 石隆



(写真7・8) 八幡神社(真庭市下岩部)昭和15年(1940)  
石匠 石隆



(写真9) 岩山神社(新見市豊永字山)昭和15年(1940) (写真10) 作楽神社(津山市院庄)平成元年(1989)  
石匠 石隆 作者不明

#### 美作地域の岡崎型狛犬の変遷

美作地域で、現在確認できている岡崎型狛犬は、63件である。一番古いものは、福本神社(美作市福本)の大正13年(1924)に造られた、酒井孫兵衛作の狛犬である(写真1)。年代、姿形から6~8代目の

作品と考えられる<sup>(註2)</sup>。

昭和7年(1933)には、入江神社(西粟倉村大茅)に作者不明の岡崎型狛犬がある(写真2)。昭和11・12年(1936・1937)には、米来神社(真庭市目木)、八幡神社(真庭市中原)に、兵庫県の石工岡田一男が

作製した狛犬がある(写真3・4)。昭和14・15年(1939・1940)になると、高良神社(津市押入)、五座神社(美作市豊国原)、八幡神社(真庭市下皆部)に2対、岩山神社(新見市豊永宇山)に津山石隆の銘がある岡崎型狛犬を確認することができる(写真5・6・7・8・9)。石隆の関係者のお話によると、昭和7年頃には岡崎市と流通があったという事なので、昭和14年以前のものの中にも、石隆製岡崎型狛犬があると考えられる。その後も石工銘は不明ながら、岡崎型狛犬を確認することができる。昭和30・40年代に入って以降は、完全に機械化がすすんでいく(写真10)。藤原好二氏は、手彫りから機械化への転換、そして現在、岡崎型が全国へ広まっている理由に関して言及している。石工の技術教育について、手彫り時代の徒弟的制度から機械化を勧める岡崎の技能養成所の出現が大きな役割を果たしたとしている。養成所には、全国から

研修生が集まって学んでいたことから、全国へ一気に岡崎型が広まっていたのではないかとしている(註3)。

#### 石隆と橋本庄太郎

さて、石隆が昭和7年頃より岡崎市と流通があつたという話より、美作地域で岡崎型狛犬を広めるのに一躍をかっていたことがわかる。「津山 石隆」と銘のある狛犬は、美作地域に6件確認できる。しかし、一番古い昭和7年の西幸神社(美咲町西幸)の狛犬は、岡崎型ではなく出雲型である(写真11)。岡崎型を導入する前は、出雲型を造っていたことが窺える。

さて、石隆がどの段階で出雲型狛犬から岡崎型狛犬へ転換したのか考えていたところ、台座に「津山市 橋本庄太郎」と銘がある出雲型狛犬を見つけた(写真12)。鶴山八幡神社(津市山北)、田植神社(倉敷



(写真11) 西幸神社(美咲町西幸) 昭和7年(1932)  
津山石隆 錄刻



(写真12) 田植神社(倉敷市粒江) 昭和3年(1928)  
津山 石工 橋本庄太郎



(写真13) 鶴山八幡神社(津市山北) 昭和3年(1928)  
津山市元魚町 橋本庄太郎 錄刻



(写真14) 田植神社(倉敷市粒江) 昭和3年(1928)  
津山 石工 橋本庄太郎



(写真 15) 常代神社(久米南町上粉)昭和 3 年(1928)  
津山 石工 橋本



(写真 16) 八幡神社(美咲町藤原)昭和 3 年(1928)  
津山 彫刻師 橋本庄太郎

市粒江)、常代神社(久米南上粉)、八幡神社(美咲町  
橋原藤原)の 4 件である(写真 13・14・15・16)。い  
ずれも昭和 3 年に造られている。思うところあり、  
石隆に問い合わせたところ、「橋本庄太郎は、石隆の  
2 代目である」と答えてくださった。関係者のお話  
によると、橋本庄太郎は細工物が得意だったようであ  
る。石隆が岡崎型を取り入れる前は、出雲型を造って  
いたことが明白になった。昭和 7 年には、岡崎市と  
流通があったということから、西幸神社の狛犬が石隆  
最後の出雲型狛犬であると考えられる。

- 【註】
- (1) たくみよし『狛かがみ』 ノサックス 2006 年
  - (2) 田渕千香子『年報 津山弥生の里 17 号』津山弥生の  
里文化財センター 2010 年
  - (3) 藤原好二『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要第 3 号』  
岡山市教育委員会 2011 年

#### おわりに

今回は、美作地域の岡崎型狛犬についてまとめ、気づいた点などをあげた。岡崎型狛犬は、現在全国的にも広がっているものであり、今後の調査でまだまだ発見があるものと考えられる。

小稿を書くにあたって、藤原好二氏には岡崎型狛犬に関する情報を教えていただいた。石隆の関係者には橋本庄太郎に関する重要な情報を教えていただいた。調査では、漆間信宏氏、須江夫妻にお世話になった。末筆ではありますが、記して御礼申し上げます。

番号	神社名(所在地)	年代	石工銘	材質	型	保存状態
1	福本神社 (美作市福本)	大正 13 (1924) 年	酒井孫兵衛	花崗岩	岡崎型	良い
2	入江神社 (西粟倉村大茅)	昭和 7 (1933) 年	不明	花崗岩	岡崎型	良い
3	米来神社 (真庭市米来)	昭和 11 (1936) 年	津之国 西宮住 岡田一男	花崗岩	岡崎型	良い
4	八幡神社 (真庭市中原)	昭和 12 (1937) 年	津之国 西宮石 匠岡田石材店	花崗岩	岡崎型	良い
5	高良神社 (津山市押入)	昭和 14 (1939) 年	石匠 石隆	花崗岩	岡崎型	良い
6	五座神社 (美作市豊国原)	昭和 15 (1940) 年	津山 石隆刻	花崗岩	岡崎型	良い
7	八幡神社 (真庭市下岱部)	昭和 15 (1940) 年	石工 津山石隆	花崗岩	岡崎型	良い
8	八幡神社 (真庭市下岱部)	昭和 15 (1940) 年	石匠 石隆	花崗岩	岡崎型	良い
9	岩山神社 (新見市豊永宇山)	昭和 15 (1940) 年	石匠 津山石隆	花崗岩	岡崎型	良い
10	作業神社 (津山市神戸)	平成元 (1989) 年	不明	花崗岩	岡崎型	良い
11	西幸神社 (美咲町西幸)	昭和 7 (1932) 年	津山石隆 彫刻	凝灰岩	出雲型	良い
12	田橋神社 (倉敷市粒江)	昭和 3 (1928) 年	橋本庄太郎	凝灰岩	出雲型	良い
13	鶴山八幡神社 (津山市山北)	昭和 3 (1928) 年	津山市元魚町橋 本庄太郎彫刻	凝灰岩	出雲型	良い
15	幣代神社 (久米南町上穂)	昭和 3 (1928) 年	津山 橋本	凝灰岩	出雲型	良い
16	八幡神社 (美咲町種原藤原)	昭和 3 (1928) 年	鄭刻師 橋本庄 太郎	凝灰岩	出雲型	良い

本稿記載の石造物データ



印 刷 仕 様

紙 質	表紙	レザッククリーム	175kg
本文		ニューエイジ	90kg
D T P O S		Windows 7 Professional	
DTP		Adobe Indesign CS6	
図版作成		Adobe Illustrator CS6	
写真調整		Adobe Photoshop CS6	
Scanning		35mm・6×7film	EPSON GT-X 970
		図面類	GRAPHTEC IMAGESCANNER TS7000

使用 Font Open Type 基本3書体（小塚ゴシック Pro、小塚明朝 Pro、MSゴシック）

画像原稿 階調画像線数は 175 線

印 刷 印刷所へは、PDF X-1a (2001) で書き出して入稿

年報 津山弥生の里 第23号（平成26年度）

---

2016年3月31日発行

発行 津山市教育委員会生涯学習部文化課  
津山弥生の里文化財センター

〒708-0824

岡山県津山市沼600-1

TEL0868-24-8413 FAX0868-24-8414

印刷 (有)弘文社

---